

合志市文化財調査報告第6集

国泰寺跡

切土造成に伴う埋蔵文化財発掘調査

2023年

合志市教育委員会

合志市文化財調査報告第6集

国泰寺跡

切土造成に伴う埋蔵文化財発掘調査



2023年

合志市教育委員会

序 文

合志市には、竹迫五山と言われる五つの寺院跡（長福寺跡、国泰寺跡、金龍寺跡、清寿院跡、金福寺跡）が存在します。今回、報告する国泰寺跡はその中の一つであり、令和2年5月から10月にかけて切土造成に伴う埋蔵文化財発掘調査として、合志市教育委員会が調査を実施しました。調査の結果、中世の墓と推定される基壇、板碑直下からは礫石経と考えられる集石遺構が確認されました。国泰寺跡に存在した墓所の発見は大きな成果となりました。その他、弥生時代の住居跡、中世の溝、多数の土器類、銅銭なども確認されました。

本報告書が市民の皆様の文化財に対する理解と認識を深める一助となり、歴史資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後に、国泰寺跡の発掘調査及び報告書作成にあたって多くのご協力、ご指導を賜りました関係各位に対し、紙上を借りて厚く御礼申し上げます。

令和5年2月

合志市教育委員会 教育長 中島 栄治

例 言

1. 本書は、合志市教育委員会が私有地の切土造成工事に伴い、発掘調査を実施した。熊本県合志市上庄に所在する国泰寺跡についての埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、令和2年5月20日から10月15日までの期間、合志市教育委員会が実施した。
3. 調査区の4級基準点測量、メッシュ杭の設置、地形測量、遺構実測は、株式会社有明測量開発社に委託した。
4. 整理作業は、合志市歴史資料館で行い、一部を株式会社有明測量開発社に委託した。
5. 遺物の実測、製図は株式会社有明測量開発社に委託した。
6. SX01・SX02 出土川原石のX線撮影を九州歴史資料館に依頼した。
7. 調査の指導を美濃口雅朗氏（熊本市役所文化振興課）に依頼し、教示を得た。
8. 本書の執筆は、米村大、前田純子、奈須和貴（合志市教育委員会）が分担して行い、前田が編集を行った。

凡 例

1. 現地での実測図は、以下の縮尺で行い本書収録の際には以下の縮尺で作成した。

遺構配置図	現地 100 分の 1	本書 200・150・100・50 分の 1
遺構実測図	現地 20 分の 1	本書 150・100・60・50・40・20 分の 1
2. 本書における遺物の縮尺は土器・陶磁器が3分の1、石器が3分の1及び3分の2、銅銭が3分の2、石造物は5分の1、鉄製品が2分の1で掲載する。

本文目次

序文

例言 凡例

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の契機	1
第2節 調査の体制	1
第3節 調査の経過	2

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と環境	3
--------------	---

第Ⅲ章 調査とその成果

第1節 遺跡の概要	7
第2節 遺跡の層位	7
第3節 調査の成果	7
[1] 縄文時代～弥生時代の遺構	7
[2] 縄文時代～弥生時代の出土遺物	13
[3] 中世の遺構	16
[4] 中世の出土遺物	25

第Ⅳ章 まとめ	33
---------	----

報告書抄録

挿図目次

第 1 図	合志市遺跡地図	5
第 2 図	調査地周辺図 (S=1/7500)	8
第 3 図	グリッド配置図 (S=1/200)	8
第 4 図	調査区南西壁面土層断面図 (S=1/60)	9
第 5 図	下層面遺構配置図① (S=1/100)	10
第 6 図	下層面遺構配置図② (S=1/100)	11
第 7 図	SD02 土層断面図及び SK06・SD03 断面図 (S=1/50)	11
第 8 図	S101 遺構実測図 (S=1/50)	12
第 9 図	SK04 出土遺物実測図	14
第 10 図	SK06・SD02 出土遺物実測図	14
第 11 図	S101 出土遺物実測図	15
第 12 図	下層面遺構平面図② (S=1/100)	17
第 13 図	SD01 遺構土層断面図及び SK05・ST01 断面図 (S=1/50)	17
第 14 図	SD01 出土遺物実測図①	18
第 15 図	SD01 出土遺物実測図②	19
第 16 図	上層面遺構配置図 (S=1/150)	21
第 17 図	SK02 遺構実測図 (S=1/60)	22
第 18 図	SX01 遺構実測図① (S=1/60)	23
第 19 図	SX01 遺構実測図② (S=1/60) 及び ST01 遺構実測図 (S=1/40)	24
第 20 図	SX01 石組実測図 (S=1/20)	25
第 21 図	SK01・SK02 出土遺物実測図	26
第 22 図	SX01 出土遺物実測図	26
第 23 図	SX02 遺構実測図 (S=1/40)	27
第 24 図	SK01 及び SX03 土層断面図 (S=1/60)	28
第 25 図	SX03 遺構実測図① (S=1/50)	28
第 26 図	SX03 遺構実測図② (S=1/20)	29
第 27 図	SX03 出土遺物実測図	30
第 28 図	SK05・SK08・SK09・SP01・SP13 出土遺物実測図	30
第 29 図	遺構外出土遺物実測図①	31
第 30 図	遺構外出土遺物実測図②	32
第 31 図	遺跡周辺図	34

表目次

第1表	台志市遺跡一覧表	6
第2表	土器観察表	36
第3表	陶磁器観察表	37
第4表	石器観察表	38
第5表	石造物観察表	38
第6表	鉄製品・銅銭観察表	38

図版目次

図版1	(1) 竹迫城跡をのぞむ(南西方向より)	図版2	(1) SX01・SX02 検出状況
	(2) 陣ノ内遺跡をのぞむ(北西方向より)		(2) 下層面遺構完掘状況
図版3	(1) SX03・SK01 土層堆積状況(南西方向より)	図版4	(1) SX01 石組遺構検出状況(南東方向より)
	(2) SX03 板碑正面		(2) SK02 土層堆積状況(南西方向より)
図版5	(1) SD01 完掘状況(北西方向より)	図版6	(1) 南西壁土層断面(北東方向より)
	(2) SD01 南東壁面土層堆積状況(北西方向より)		(2) SD02 完掘状況(東方向より)
図版7	(1) SI01 完掘状況(南東方向より)	図版8	(1) 出土遺物(陶磁器等)
	(2) SK04 遺物出土状況		(2) 出土遺物(土師器)
図版9	(1) 出土遺物(銅銭)	図版10	(1) 出土遺物(弥生土器)
	(2) 出土遺物(石器)		(2) 出土遺物(縄文土器 深鉢)

第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査の契機

今回の発掘調査は、竹迫五山の 1 つ「青龍山 国泰寺跡」と伝わる箇所の発掘調査であった。調査原因は、個人所有地の切土による駐車場工事であったため、所有者と協議を行い埋蔵文化財包蔵地ではなかったため、試掘調査を令和元年 9 月 5・6 日に実施した。その結果、遺構が確認されたことから遺跡地図の変更を行った。また、駐車場工事を回避することは困難であったため、本調査を令和 2 年に実施することとなった。

第 2 節 調査の体制

発掘調査 (令和 2 年度)

調査主体 合志市教育委員会

調査責任者 中島 栄治 (教育長)

調査事務局 岩男 竜彦 (教育部長)

栗木 清智 (生涯学習課長)

山隈 和徳 (生涯学習課長補佐)

境 真奈美 (生涯学習課主幹)

調査担当者 米村 大 (生涯学習課文化財担当主査)

前田 純子 (生涯学習課文化財担当主事)

奈須 和貴 (文化財発掘調査補助員)

調査指導者 美濃口雅朗 (熊本市役所文化振興課)

調査協力者 長谷部善一 (熊本県教育庁文化課)

宮崎 敬士 (熊本県教育庁文化課)

木村 龍生 (熊本県教育庁文化課)

藤島 志考 (熊本市役所文化振興課)

岡田 有矢 (熊本市役所文化振興課)

柳田 快明 (熊本中世史研究会)

今井 豪照

発掘作業員 栗崎 強・古閑 誠也・坂本 精一・野田 誠昭・藤木 悌一・三好 茂昭・村山 國誠・

森 直人・吉村 弘・福永 美代子

整理作業員 有瀬 美保

整理報告書作成 (令和 3 年度)

調査主体 合志市教育委員会

調査責任者 中島 栄治 (教育長)

調査事務局 岩男 竜彦 (教育部長)

飯開 輝久雄 (生涯学習課長)

山隈 和徳 (生涯学習課長補佐)

境 真奈美 (生涯学習課主幹)

調査担当者 米村 大 (生涯学習課文化財担当主査)

前田 純子 (生涯学習課文化財担当主事)

奈須 和貴 (文化財発掘調査補助員)

整理報告書作成（令和4年度）

調査主体	合志市教育委員会
調査責任者	中島 栄治（教育長）
調査事務局	岩男 竜彦（教育部長） 牧野 淳一（生涯学習課長） 山隈 和徳（生涯学習課長補佐） 遠坂 未来子（生涯学習課主幹）
調査担当者	米村 大（生涯学習課文化財担当主幹） 前田 純子（生涯学習課文化財担当主事） 奈須 和貴（文化財発掘調査補助員）

第3節 調査の経過

5月20日～22日	表土掘削、調査区設定、包含層掘削、環境整備
5月25日～29日	包含層掘削、トレンチ掘削、遺構検出
6月1日～5日	包含層掘削、斜面部掘削、SX01掘削
6月8日～12日	I・II層掘削、SX01・03サブトレンチ設定、メッシュ杭設置
6月15日～19日	II層掘削、SX01・SK01掘削、SX03写真測量
6月22日～24日	SX01・03サブトレンチ掘削、SX01検出写真撮影及び写真測量、SX01移設
7月1日～3日	SX01・03・SK02サブトレンチ設定、SX02掘削、SK01完掘状況撮影、上層面遺構実測
7月8日～10日	SX01・SX02・C4グリッド掘削
7月13日～17日	SX02写真測量、SX01掘削
7月20日～22日	空撮（第1回）、SX01・02掘削、SX01石組遺構写真測量
7月27日～31日	SK02・SX01トレンチ掘削、SK02土層断面実測、SK02完掘
8月3日～7日	下層面表土掘削、環境整備
8月12日～14日	遺構検出、SX03直下集石検出、環境整備
8月17日～21日	SD01・02・SX03直下集石掘削、ST01半截
8月24日～28日	SD01・02、ST01・SK03・SX03直下集石掘削
9月18日～25日	SX03直下集石・SD01・ST01・SK02掘削、遺構検出
9月28日～30日	ST01・02、SK02・04、SD01掘削、南西調査区拡張
10月1日～2日	西南壁土層断面分層、SI01掘削
10月5日～9日	SP04・10・SI01掘削
10月12日～15日	空撮（第2回）、下層面遺構実測、下層面遺構完掘写真撮影

第Ⅱ章 遺跡の環境

第Ⅰ節 遺跡の位置と環境

合志台地は、透水性が強く、雨水は地下に浸透することから、起伏の少ない傾斜の緩やかな地形である。菊池川水系である合志川は阿蘇外輪山の鞍岳を源とし、その合志川に流れ込む支流は台地を侵食する谷地形を形成している。本遺跡の北東側には、合志川の支流である塩浸川上流の芋拔（おこぎ）川が流れている。本遺跡北東側500m付近には竹迫城跡が存在し、北側に原口新城跡の一部にあたる竹迫日吉神社が近接している。竹迫日吉神社と本遺跡の間に存在する道は、「竹迫城絵図」に「犬ノ馬場等ノ古跡有」の記載がある。保育園建設に伴う原口新城跡の調査では、中世寺院に関連する遺構が確認された。また、南東側に合志小学校建設に伴う発掘調査が行われた陣ノ内遺跡がある。陣ノ内遺跡は、中世竹迫氏に関連した館跡から合志氏菩提寺であった清寿院跡に変わると推定されている。

縄文時代

本市では、旧石器時代の遺跡は発見されていない。御手洗遺跡は、縄文時代後期「御手洗式土器」の標式遺跡である。二子山石器製作遺跡（国指定史跡）では、玄武岩質安山岩を母岩として打製石器を製作した痕跡が良好に遺存する。須屋城跡発掘調査では、曾畑式土器に先行する野口式と考えられる土器群が出土している。

弥生時代

本遺跡周辺には、弥生時代中期～後期の集落があったと考えられる陣ノ内遺跡・宮ノ前遺跡や「S」字文鏡が出土した木瀬遺跡が分布している。弥生時代後期の豊楢より南海産のゴホウラ製腕輪が出土した御領遺跡もある。塩浸川下流域の高木原台地の発掘調査では、弥生時代後期の竪穴建物跡が石立遺跡4軒、八反田遺跡15軒、八反畑遺跡5軒、八反原遺跡53軒が確認された。また、石立遺跡で3重の円弧を描く溝が検出され、八反畑遺跡では、延長約70mの溝が検出され、環濠集落の可能性が考えられている。県内で初めて竪穴住居の発掘調査が行われた高木原遺跡でも平成30年に発掘調査が行われ、弥生時代後期の竪穴建物跡7軒が確認された。須屋付近でも弥生時代の集落が存在しており、宿の山遺跡では竪穴建物跡が検出され、また宿の山遺跡、梨ノ木遺跡からは中期の豊棺が出土している。

古墳時代

塩浸川上流域右岸には、中林古墳が造営され円墳が2基認められる。中林古墳に近い千経塚遺跡の発掘調査では、方形周溝墓6基が確認されている。

塩浸川下流域の八反原遺跡では、方形周溝墓10基、円墳19基が検出されている。4世紀後半～末頃の方形周溝墓から5世紀前半以降の円墳へ推移する。八反原遺跡2・3号墳や上生上ノ原遺跡では、九州でも初期の馬具（轡）が出土した。^{註1} また、上生上ノ原遺跡では三角板鋸留短甲が出土している。八反原遺跡の6基の周溝からは、殉葬馬の可能性が高い馬骨が馬具とともに出土した。以上のように、八反原遺跡を始めとする生坪塚山古墳や黒松古墳群のある合志川中流域左岸の台地周辺には、朝鮮半島の渡来文化が認められ、中央政権との強い結び付きを示している。^{註2} 沖田遺跡では上生上ノ原遺跡と同様、古墳時代前期の竪穴建物跡が3軒検出された。

山本部の分立した合志郡の範囲（合志・西合志・泗水・旭志・菊陽・大津町）には、前方後円墳が分布しておらず、この地域の特徴が挙げられる。

古代

貞観元（859）年、合志郡から山本部が分立し、肥後国は14郡になる（『日本三代実録』巻2）。『和名類聚抄』によれば合志郡は、合志郷、小川郷、山道郷、鳥嶋郷、口益郷、鳥取郷の6郷からなり比定地は諸説あり定まっ

ていない。郡衙の推定地は、玉蓮寺跡及び地名「小合志」、高木原遺跡及び千束遺跡、上鶴頭遺跡、住吉日吉神社などが挙げられるが不明である。八反田遺跡、八反畑遺跡、八反原遺跡、迫原遺跡の発掘調査では、合計 163 軒の竪穴建物跡が確認されている。出土遺物は、墨書土器や刻書土器をはじめその他の遺物の年代から 8 世紀後半から 9 世紀前半の遺物が主体である。註 3) 千束遺跡では発掘調査の結果、方形に巡る溝、掘立柱建物、蔵骨器、円面硯、輸入陶磁器が出土している。また、熊本県教育委員会による出口遺跡、揚土遺跡、峠遺跡の発掘調査において墨書土器が多数出土している。豊岡天神本遺跡では土師器の蔵骨器から奈良時代の唐式鏡(瑞雲双鸞八花鏡)が出土しており、郡司クラスの存在が窺える。

中世

古代の律令体制は、10 世紀初頭には崩壊し、国司が徴税請負人となり地方政治を一任された。国司は郡司や有力農民に租税を請け負わせる方式を採った結果、次第に成長した開発領主は国司と対立を深め中央の貴族や社寺に土地を寄進することで領地の支配権を確立していく。この地域に関して「天満宮託宣記」に正暦 3 (992) 年「合志荘」が大宰府安楽寺領となるとある。また、「東大寺諸荘開文書目録」に久安 4 (1142) 年、観世音寺に関係する荘園である「竹迫別符」をみることができる。

竹迫氏は、12 世紀末に合志郡地頭職として中原親能の四男中原師員が downward と「肥後国誌」にある。また、竹迫氏は豊後の大友、肥後の鹿子木、三池氏と同族関係として家系図にある。さらに「妙正寺文書」では、貞和年間(14 世紀半ば)に鹿子木貞基から種継に代わり、竹迫を名乗るともあり、定説をみない。

合志氏は、菊池系合志、中原系合志、佐々木系合志の 3 系統に別れるようであるが系譜を迫る史料は確認できない。合志郡半郡の地頭職となった佐々木系合志は、南北朝時代に北朝方として菊池氏と対峙し、武勇の優れた合志幸隆は大友氏とともに菊池城を攻め一時、陥落させる。天正 13 (1585) 年、合志氏は高津氏に降伏し、高重は薩摩羽月で殺害されたとされる。天正 15 (1587) 年、豊臣秀吉の九州平定が行われる。

平成 17 年合志小学校新築事業に伴う陣ノ内遺跡発掘調査では、14～16 世紀の複数の堀が検出され、館跡の区画が存在したことが判明した。報告書では、文献調査なども合わせ竹迫氏の館跡から合志氏の菩提寺である清寿院跡に変遷した遺跡との位置付けを行っている。また、文献調査において竹迫城絵図の描かれた背景なども判明した。中世において稲作に適さない台地の生業に関して、大山氏は、肥後において大宰府天満宮の「御燈油料所」を旧合志郡内の「富納」、「片俣」にあったことを確認し、窪胡麻の栽培を背景とした油の生産が合志氏の経済力を支える一部であったことを指摘している。註 4)

須屋氏については、南北朝期の興国 3 (1342) 年、菊池氏の武士起請文に須屋刑部という名がみられ、菊池氏の支配下にあったことがわかる。16 世紀に合志氏が竹迫城跡に拠点を移し、家臣の財産を整理したと考えられる厳照寺文書「社寺方并侍中坪付写」には、須屋新九郎という人物がみられることから合志氏の家臣であったことが窺える。

須屋城跡では、発掘調査の結果、現存していた L 字状の土塁の外側に幅約 3 m、深さ約 2 m の堀が南北方向に 56 m、また、東西に並行する長さ 90 m の 2 条の堀が確認された。これらの堀は、城域を T 字状に区画する。土塁の出土遺物からは、14 世紀～15 世紀頃に築造された可能性が高い。註 5)

註

註 1) 桃崎 若編 2007 「馬具からみた中朝古墳の編年」(九州島における中朝古墳の再検討)九州前方向地研報告書

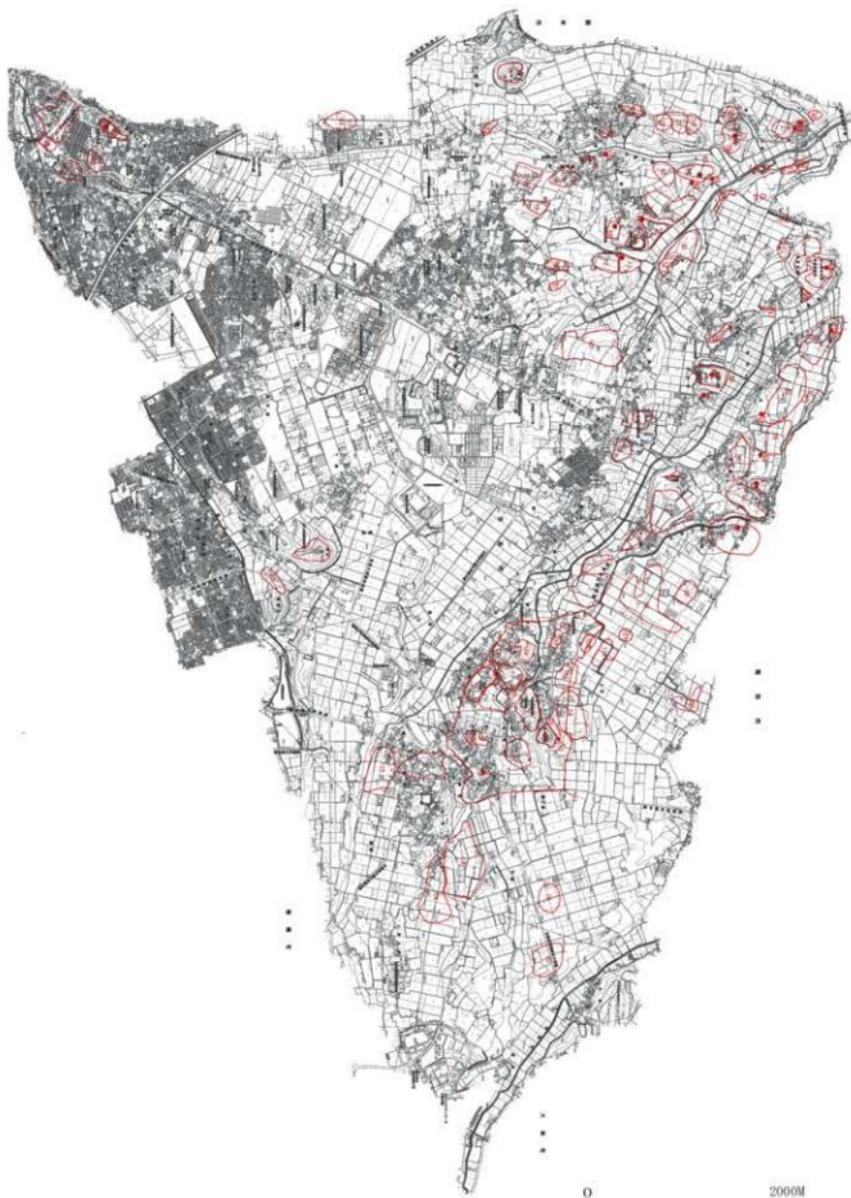
神野崇 2022 「九州における古墳時代中朝の地制集落・墓」『嶺日』(熊本・武蔵・馬具) 第 14 回編年・九州合同考古学大会

註 2) 杉井 健 2010 「肥後地域における百舌草系土器の編年と古墳時代」(九州における百舌草系土器の再検討)九州前方向地研報告書

註 3) 藤田 信博 1995 「第 7 章 山本郡の独立」『西合志町史』

註 4) 大山 研五 2008 「肥後国開拓の存在形態—肥後国合志氏を素材として—」『本史学』第 89・90・91 合併号

註 5) 藤田 信博 2013 「須屋城跡」合志市文化財調査報告書 第 2 集



第1図 合志市遺跡地図

第Ⅲ章 調査とその成果

第1節 遺跡の概要

調査地は、合志市上庄字宮ノ前に位置し北東に原口新城跡の一部にあたる竹迫日吉神社が近接しており、南東側に平成17年の合志小学校建設に伴う発掘調査が行われた陣ノ内遺跡がある。陣ノ内遺跡は、中世竹迫氏の館跡と推定されている。調査地は、道路より約3mの高さにあり、周辺は既に削平されている。調査では上層面と下層面における2面の検出面を確認できた。上層面の検出面であるⅡ層では、中世の時期における遺構が検出された。竹根が多く、土層を把握することは困難であった。下層面の検出面であるⅥ層では、弥生時代後期の遺構と中世の時期における遺構が混在して確認された。検出された遺構は、弥生時代後期の竪穴建物跡1基、溝状遺構1条、中世の溝1条、基壇状遺構2基のうち1基は、中世墓と考えられる。また、板碑が設置された遺構が確認された。

第2節 遺跡の層位

基本土層は、表土下にⅠ層からⅧ層を設定した。Ⅱ層は、中世の基壇状遺構のSX02と板碑を伴う遺構のSX03の基盤層である。Ⅲ層は、SK02の検出面に相当する。Ⅳ層は、中世の溝を埋めており、整地層と考えている。Ⅴ層は、中世の溝であるSD01と弥生時代の溝であるSD02の検出面に相当する。Ⅵ層は、黒褐色粘質土が約30cm堆積しており、この層を細分しⅥ¹層を設けた。Ⅶ層はクロニガ、Ⅷ層はニガシロである。

第3節 調査の成果

[1] 縄文時代～弥生時代の遺構

SK04 (第7図)

調査区北東のC3グリッドに位置する土坑で、直径0.50m、深さ0.125mを測る。プランは円形を呈しており、埋土からは外面に煤が付着した縄文時代晩期の深鉢胴部片が出土した。当初は埋糞を想定していたが、出土状況から埋糞ではなく、性格は不明である。

SK06 (第7図)

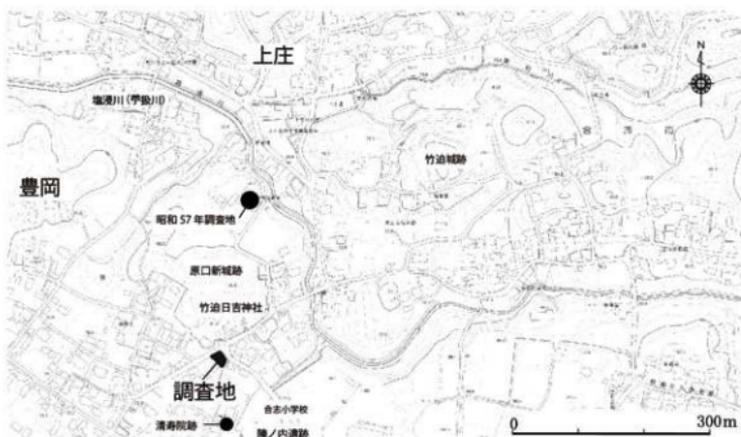
調査区北東のC3グリッドに位置する土坑であり、プランは円形を呈し、断面形状はテラスが付く。規模は、直径0.70m、深さ0.34mを測る。埋土からは、弥生土器の甕または壺の胴部片が出土した。

SD02 (第7図)

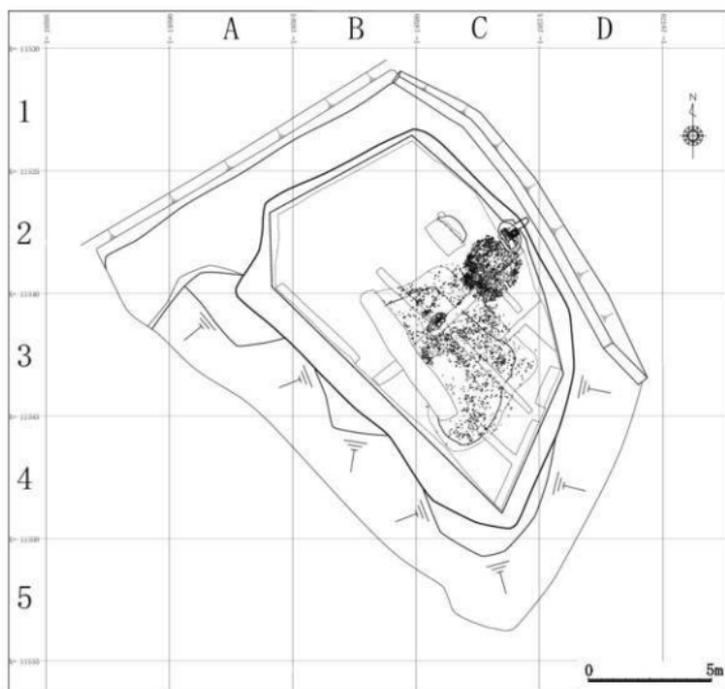
調査区北西端のA2・B1・B2・C1・C2グリッドに位置する溝状遺構である。調査区端で検出されたため全体は不明であるが残存する規模は、長さ約8.5m、幅約2.3m、基底部から最も深い部分の深さ約1.4mを測る。基底部は段付きの「V」字状を呈しており、段をもつ形状である。検出面はⅤ層である。土層堆積状況は、基底部の⑬～⑭層の埋土はクロニガ(Ⅶ層)、ニガシロ(Ⅷ層)が主体であることから自然堆積層であると判断できる。また、⑥～⑪層の堆積は、⑧層まで埋没した段階で再度掘削している可能性を示す。埋土からは、弥生土器、磨製石斧、鉄鏃が出土した。

SD03 (第7図)

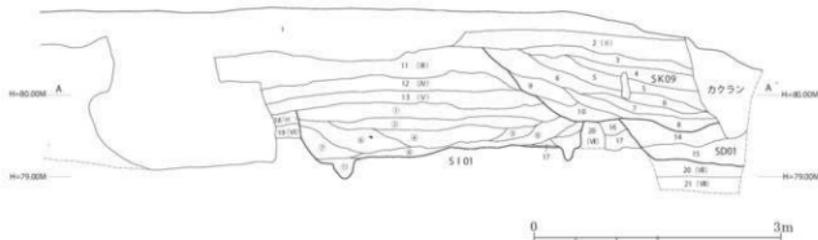
調査区西側のA2・B2グリッドに位置する溝状遺構である。規模は、長さ約6.5m、幅約0.7m、深さ約0.2mを測り、基底部は「U」字状を呈している。遺物は弥生土器の小片が出土した。切り合い関係から、SD03はSD02より先行する。遺物は弥生土器の小片が出土した。



第2図 調査地周辺図(S=1/7500)



第3図 グリッド配置図(S=1/200)



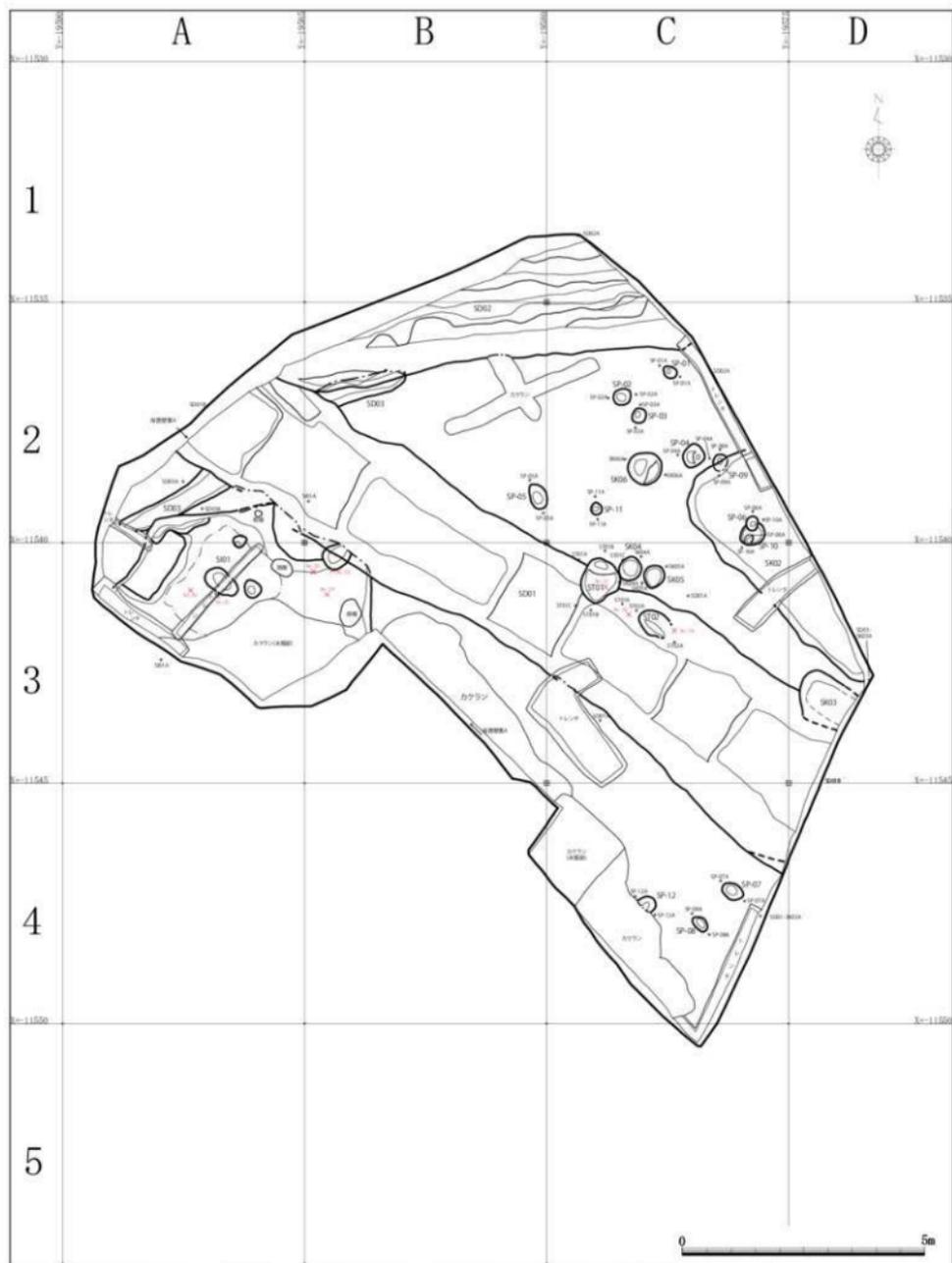
南西壁面土層注記

- 1 10% 黄緑 2/2 カクラン
- 2 7.5% 黄緑 2/2 砂層に対応。
- 3 7.5% 黄緑 2/3 しまりはある。やや粘質。1cm程度のブロック状のクロニガを少量含む。(S400)
- 4 7.5% 黄緑 2/3 しまりはある。やや粘質。0.1～0.2cmの黄褐色粒を少量含む。2～5cmのブロック状のクロニガを多く含む。(S600)
- 5 7.5% 黄緑 2/3 しまりはある。やや粘質。1～5cmのブロック状のクロニガを少量含む。(S600)
- 6 7.5% 黄緑 2/2 しまりはある。やや粘質。1～5cmのブロック状のクロニガを少量含む。(S600)
- 7 7.5% 黄緑 3/2 しまりはある。やや粘質。1～5cmのブロック状のクロニガを多く含み、0.1cm程度の黄褐色粒を少量含む。(S400)
- 8 7.5% 黄緑 3/3 しまりはない。やや粘質。1cm程度のブロック状のクロニガと0.1cm程度の黄褐色粒を少量含む。(S600)
- 9 7.5% 黄緑 3/2 しまりはある。やや粘質。0.1～0.2cmの褐色粒と黄褐色粒を少量含む。(S400)
- 10 7.5% 黄緑 3/2 しまりは中程度。3～4cmのブロック状のクロニガを少量含む。0.1cm程度の黄褐色粒を少量含む。(S400)
- 11 7.5% 黄緑 2/2 砂層に対応。
- 12 7.5% 黄緑 3/3 砂層に対応。
- 13 7.5% 黄緑 2/2 V層に対応。
- 14 7.5% 黄緑 2/2 しまりはある。やや粘質。粘土を多く含み、10～30cm程度のブロック状のクロニガを少量と0.1～0.2cmの黄褐色粒を少量含む。
- 15 7.5% 黄緑 2/2 しまりはある。0.1～1mmの黄褐色粒と1～5cmのブロック状のクロニガを多く含む。
- 16 7.5% 黄緑 2/2 しまりはある。やや粘質。粘土を多く含み、0.1～0.5cmの褐色粒を多く含む。
- 17 7.5% 黄緑 2/2 しまりはある。やや粘質。30cm程度のブロック状のクロニガを含む。褐色粒は少ない。
- 18 7.5% 黄緑 2/2 V層に対応。
- 19 7.5% 黄緑 2/2 V層に対応。
- 20 7.5% 黄緑 2/3 V層に対応。
- 21 10% 黄緑色 5/6 砂層に対応。

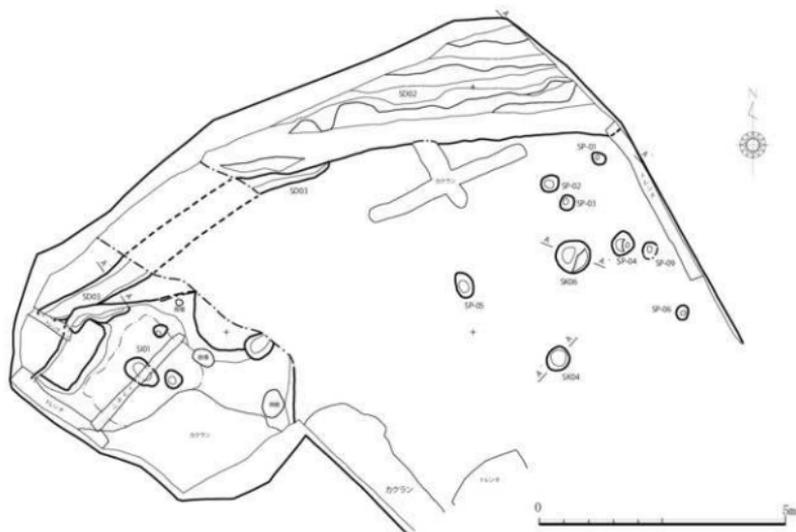
基本土層

- I層 10% 黄緑 2/2 しまりはない。やや粘質。
- II層 7.5% 黄緑 2/2 しまりはない。やや粘質。クロニガをやや多く含む。
- III層 7.5% 黄緑 2/2 II層よりしまりはない。やや粘質。2～3cmのブロック状のクロニガを少量含む。0.1～0.3mmの褐色粒をやや多く含む。
- IV層 7.5% 黄緑 3/3 II層よりしまりはない。やや粘質。全体にクロニガを多く含む。0.1～0.3mmの褐色粒をやや多く含む。
- V層 7.5% 黄緑 2/2 しまりはない。やや粘質。0.1～0.3mmの褐色粒を少量含む。
- VI層 7.5% 黄緑 2/2 しまりはある。やや粘質。2～4cmのブロック状のクロニガを少量含む。
- VII層 7.5% 黄緑 2/2 しまりはある。やや粘質。0.1～0.2mmの褐色粒を少量含む。
- VIII層 7.5% 黄緑 2/2 クロニガ
- IX層 10% 黄緑 5/6 ニガシロ

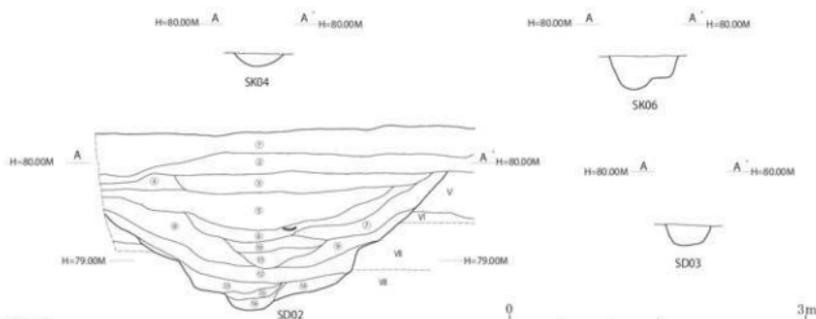
第4図 調査区南西壁面土層断面図 (S=1/60)



第5図 下層面遺構配置図① (S=1/100)



第6図 下層面遺構配置図②(S=1/100)



SK02 土層断面

- ◎ 黄土
- ① 7.5m 黄緑 2/2 しまりはある。1～2cm のブロック状のクロニガを少量含む。やや粗粒。断面に割。
- ② 7.5m 黄緑 2/3 ◎よりしまりは強い。やや粗粒。1～0.2m の黄褐色粒を少量含む。1～2cm のブロック状のクロニガを少量含む。
- ③ 7.5m 黄緑 3/2 しまりはある。やや粗粒。1～0.2cm の黄褐色粒をわずかに含む。
- ④ 7.5m 黄緑 2/2 しまりは強い。やや粗粒。1～0.5cm 黄褐色粒をやや多く含む。
- ⑤ 7.5m 黄緑 3/2 ◎と同色だが、やや弱さい色。しまりは強い。やや粗粒。1～0.2cm の黄褐色粒を多く含む。土層片を含む。
- ⑥ 7.5m 黄緑 3/2 ◎と同色だが、やや弱さい色。しまりはある。やや粗粒。1～0.2cm の黄褐色粒を少量含む。
- ⑦ 7.5m 黄緑 3/2 しまりは強い。やや粗粒。1～0.5cm の黄褐色粒をやや多く含む。1～4cm のブロック状のクロニガを少量含む。
- ⑧ 7.5m 黄緑 2/2 しまりはある。やや粗粒。1～0.5cm の黄褐色粒を少量含む。土層片に強くササザラしている。
- ⑨ 7.5m 黄緑 3/2 しまりはある。やや粗粒。1～0.5cm の黄褐色粒をやや多く含む。
- ⑩ 7.5m 黄緑 3/2 ◎と同色。同層だが、黄褐色粒は少なく、1～2cm のブロック状のクロニガをわずかに含む。
- ⑪ 7.5m 黄緑 3/2 ◎と同色だが、やや弱さい色。しまりはある。やや粗粒。0.1～1cm の黄褐色粒とブロック状の黄褐色粒土を多く含む。1～2cm のブロック状のクロニガを少量含む。土層片を一個含む。
- ⑫ 7.5m 黄緑 3/2 ◎と同色。1～10cm の黄褐色粒とブロック状の黄褐色粒が少量混入している。しまりは強い。やや粗粒。粒子が丸くササザラした土は多くない。
- ⑬ 7.5m 黄緑 3/2 ◎と同色。同層だが、粒子が丸くササザラした土は多い。
- ⑭ 7.5m 黄緑 3/2 ◎と同色。同層だが、◎より 0.1～1cm の黄褐色粒とブロック状の黄褐色粒土を多く含む。
- ⑮ 7.5m 黄緑 3/2 ◎と同色。同層だが、◎より更に 0.1～1cm 黄褐色粒とブロック状の黄褐色粒土を多く含む。

◎◎は断面参照

SK04 土層断面

- 7.5m 黄緑 2/2 しまりはある。やや粗粒。
- 7.5m 黄緑 3/2 しまりはある。やや粗粒。

SK06 土層断面

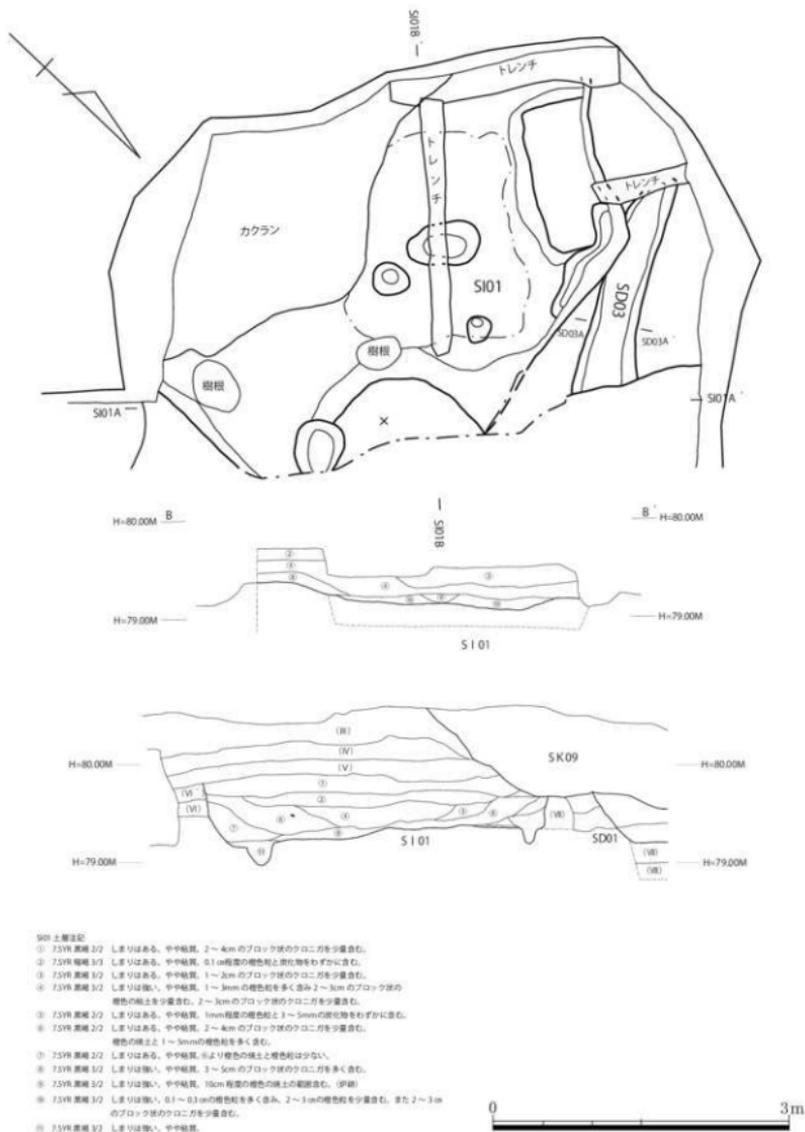
- 7.5m 黄緑 2/2 しまりはある。やや粗粒。

SD03 土層断面

- 7.5m 黄緑 2/2 しまりはある。0.1～1cm の黄褐色粒とブロック状の黄褐色粒土を多く含む。1～5cm のブロック状のクロニガを多く含む。

- ⑭ ◎ 7.5m 黄緑 2/2 しまりはある。やや粗粒。0.1～0.2cm の褐色粒を少量含む。
- ⑮ ◎ 7.5m 黄緑 2/2 クロニガ
- ⑯ ◎ 7.5m 黄緑 3/2 ◎より◎

第7図 SK02 土層断面図及び SK06・SD03 断面図 (S=1/50)



第8図 SI01 遺構実測図 (S=1/50)

SI01 (第8図)

調査区西側のA2・A3グリッドに位置する弥生時代後期の竪穴建物跡である。平面プランは、南側を攪乱により失われていたが方形プランを推定できる。残存する規模は、長軸3.45m、短軸2.65mを測る。床面は、検出面からの深さ約0.5mを測り、中央に約2.1m×約1.9mの範囲に硬化面が認められた。柱穴は2本を検出した。中央の炉跡埋土からは厚さ約10cmの焼土が確認され、少量の炭化物が含まれていた。北東側に位置した隅丸状を呈するベッド状遺構の規模は、長軸約1.8m、短軸約0.6m、高さ約0.1mである。また、北西側の長方形を呈するベッド状遺構の規模は、長軸約1.8m、短軸約0.8m、高さ約0.04mである。北東側のベッド状遺構には、接する位置で土坑が確認された。また、北西側のベッド状遺構下位には、幅0.37mの周壁溝と考えられる溝を検出した。南西壁面土層断面において、検出面はⅥ層であり、その上位にあたるⅤ層により埋没していることからSI01は、SD01より先行する。また、埋土の⑥・⑦層に多くの焼土を含む層を確認した。

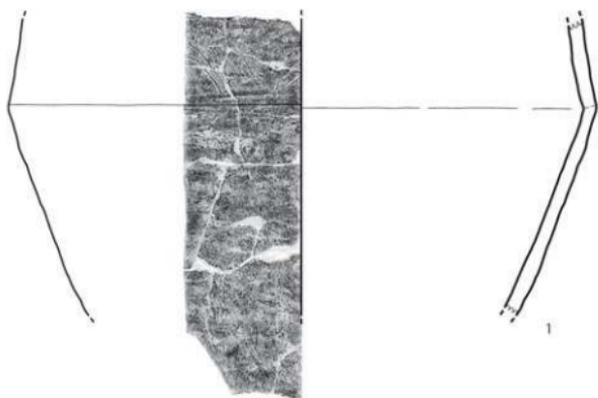
[2] 縄文時代～弥生時代の出土遺物 (第9図～第11図・第14図～第15図)

SK04出土遺物の1は、縄文時代晩期の深鉢である。胴部が1/3程度残っており、最大胴部径は36cmを測る。胴部の上位は、屈曲部より内湾せず直線的である。

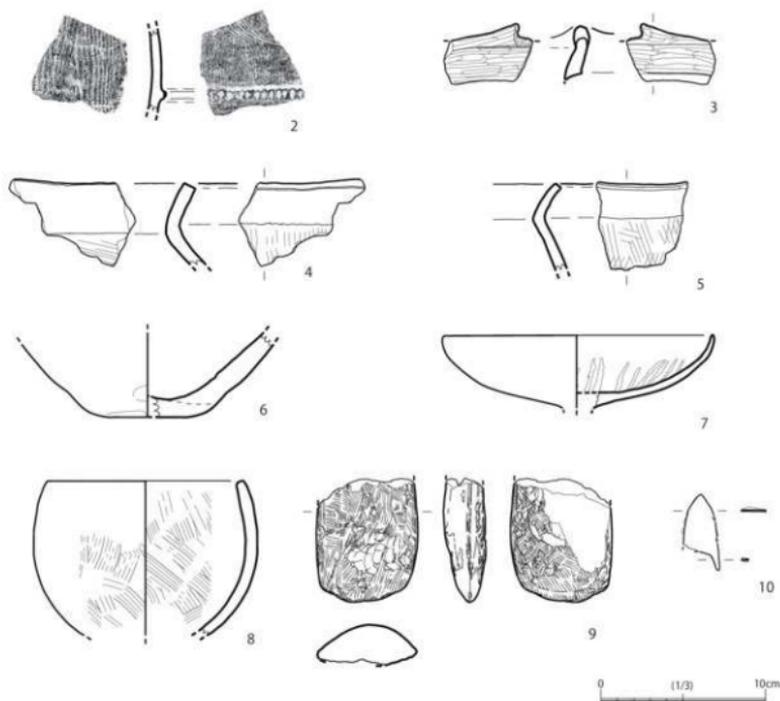
SK06出土遺物の2は、弥生土器の甕または壺の胴部で、外面に突帯を貼り付け、刻み目を施す。

SD02出土遺物は、3～10である。3は、黒色磨研土器の破片で、口唇部にリボン状突起を持つ浅鉢である。4、5は弥生時代後期の甕で口縁部の破片。6は、弥生土器の壺の底部である。7は、弥生土器の高坏で、坏部内面は、中心から口縁部に向かって放射状にヘラミガキを施す。8は、弥生時代後期の鉢型土器で、脚付の可能性もある。9は、磨製石斧で、石材は蛇紋岩。10は、鉄鎌である。

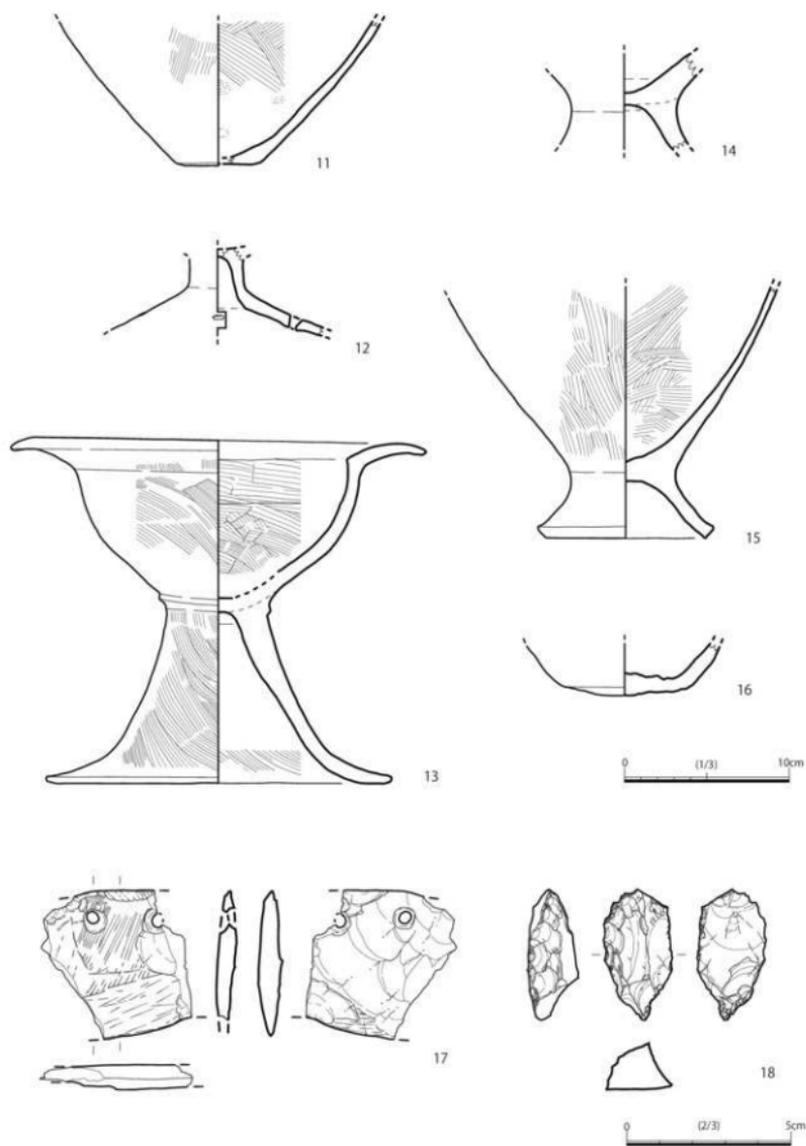
SI01出土遺物は、11～18である。11は、弥生時代後期の壺底部。12、13は、弥生時代後期の高坏である。12は、脚部の4箇所に穿孔を施す低脚高坏である。13は、口唇部の広い坏部と肥厚して裾部の広がった脚部を接合している。14と15は、弥生時代後期の脚台付の甕である。16は、壺の底部とみられ、器面が剥離しているため詳細は不明。17は、石包丁で石材は頁石、両端部が欠損。18は、スクレイパーで、石材はチャート、完形である。



第9图 SK04 出土遗物实测图



第10图 SK06・SD02 出土遗物实测图



第 11 図 SI01 出土遺物実測図

[3] 中世の遺構

SD01 (第13図)

調査区北西から南東方向に延びる溝状遺構である。断面形状は、箱型で南東方向へ緩やかに下る。規模は長さ約14.5m、幅約2.1m～3.2m、深さ約1.5mを測る。障子堀状を呈しており、方形の段が3箇所に認められた。凸状面の縦断方向の幅は、北西側で約2.0m、中央で約1.5m、南東側で約1.5mを測る。検出面はV層であり、整地層と考えられるIV層に覆われる。出土遺物は、中世陶磁器や銅銭などが認められた。

SK01 (第24図)

SK01は、C2グリッドに位置する土坑である。試掘調査トレンチの断面において長軸約1.4m、深さ約0.6mを確認した。断面形は、箱型を呈し、南東側に緩やかな段をもつ。SX03に伴う遺構と考えられる。

SK02 (第17図)

調査区東側のC2・C3・D3グリッドに位置する大型の土坑であり、規模は、長軸約5.2m、短軸約2.1m、深さ約1.35mを測る。上層面掘削後に下層面では調査区を拡張し、掘削を行った。平面プランは、全体の1/3程の検出であったが、長方形に近いプランと推定できる。断面形は、短軸方向の断面において段を設けた形状である。

検出面は、Ⅲ層であり土層堆積状況から人為的な堆積を示す。特に、⑤層では川原石を多量に含んでいた。SK02は、SX01の基壇裾部に覆われており、SX01に先行する。埋土からは、中世の白磁、土師器などが出土した。

SK03 (第13図)

調査区東側のD3グリッドに位置する土坑であり、規模は、長軸約1.1m、短軸約0.9m、深さ約0.55mを測る。調査区壁面の土層断面からSK03は、SD01に後出する。

SK05 (第13図)

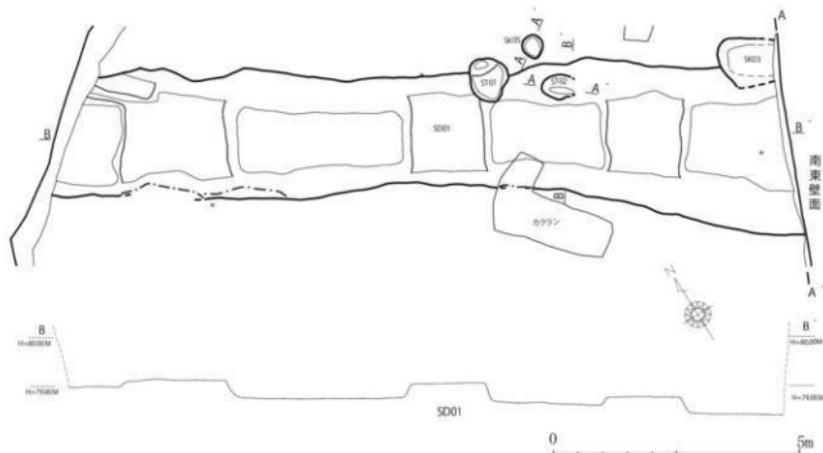
調査区北東のC3グリッドで検出された土坑であり、平面プランは楕円形を呈する。規模は、直径0.45m、深さ0.12mを測る。埋土からは鉄製の穿孔具とみられる遺物が出土した。

SK09 (第4図)

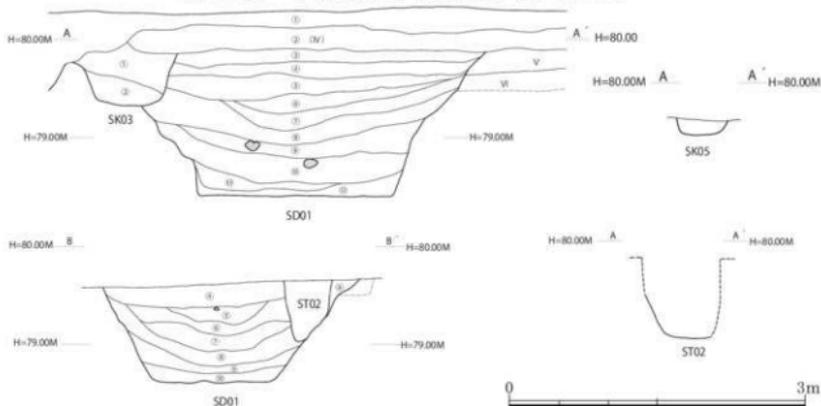
調査区南東のA2・A3・B3グリッドに位置する土坑である。検出面はⅢ層であり、断面形は段を設けた形状で、南西壁面において規模は、幅約2.85m、深さ約1.0mを測る。埋土からは中世の瓦質土器などが出土した。

ST02 (第13図)

ST02は調査区北東のC3グリッドで検出された土壇でST01に近接する。平面プランは、細長い円形状を呈し、断面形は箱型であったと推測される。規模は、残存する長軸約0.8m、推定される深さ約0.8mを測る。土層断面においてSD01と切り合い関係にあり、SD01に後出する。埋土より骨片がわずかに出土していることからST01と同じくSX01に伴う土壇の可能性はある。



第12図 下層面遺構平面図② (S=1/100)



SD01 土層表記

- ① 7.5m 厚層 2/2 しまりはある。0.1～0.2cmの黄褐色粘土を多量含む。0.5～1.0cmの黄褐色粘土を少量含む。4～6cmのブロック状のクワコガを少量含む。(表土)
- ② 7.5m 厚層 3/3 しまりは無い。やや粘り。0.1～0.5cmの褐色粘土を多量含む。V層に相当。
- ③ 7.5m 厚層 3/2 0.1～0.2cmの黄褐色粘土と褐色粘土や中多く含む。0.1cm程度の炭化物を少量含む。しまりは無い。やや粘り。
- ④ 7.5m 厚層 2/2 0.1cm程度の褐色粘土を少量含む。1～2cmのブロック状のクワコガを少量含む。しまりはある。やや粘り。南西側にV層の土が少量入り込む。
- ⑤ 7.5m 厚層 2/2 ①と同等だが、やや粘り。0.1～0.3cmの褐色粘土と黄褐色粘土を少量含む。しまりはある。やや粘り。
- ⑥ 7.5m 厚層 2/2 ①と同等だが、やや粘り。0.1～2.0cmの褐色粘土と黄褐色粘土を中多く含む。しまりはある。やや粘り。
- ⑦ 7.5m 厚層 3/2 ①と②のやや黄褐色粘土を混ぜる。0.1～0.2cmの褐色粘土を少量含む。しまりはある。やや粘り。2～5cmのブロック状のクワコガを多く含む。
- ⑧ 7.5m 厚層 3/0 ①と同等だが、やや粘り。0.1cm程度の黄褐色粘土を多く含む。しまりは無い。やや粘り。
- ⑨ 7.5m 厚層 2/2 0.1cm程度の黄褐色粘土を少量含む。しまりはある。やや粘りが高い。10～20cmのブロック状のクワコガを少量含む。
- ⑩ 7.5m 厚層 2/0 0.1～0.3cmの黄褐色粘土を中多く含む。しまりはある。粘りが高い。2～5cmのブロック状のクワコガを少量含む。
- ⑪ 7.5m 厚層 2/0 0.1～0.3cmの黄褐色粘土を少量含むと0.2～0.5cmの小石粘土を中多く含む。安群間にガラガラしている。しまりはある。やや粘り。2～4cmのブロック状のクワコガを中多く含む。
- ⑫ 30m 厚層 5/6 黄褐色粘土と7.5m 厚層 3/2の土との混合。0.5～2cmの黄褐色粘土とブロック状の黄褐色粘土を多く含む。しまりはある。粘りが高い。①よりやや黄褐色が強い。

SK03 土層表記

- ① 7.5m 厚層 2/2 SD01の土よりわずかに粘り。②よりわずかに強い。しまりはある。やや粘り。0.3cm程度の褐色粘土を少量含む。
- ② 7.5m 厚層 2/2 ①と同等。同質だが、わずかに強い。0.1cm程度の黄褐色粘土をわずかに含む。4～5cmのブロック状のクワコガを少量含む。

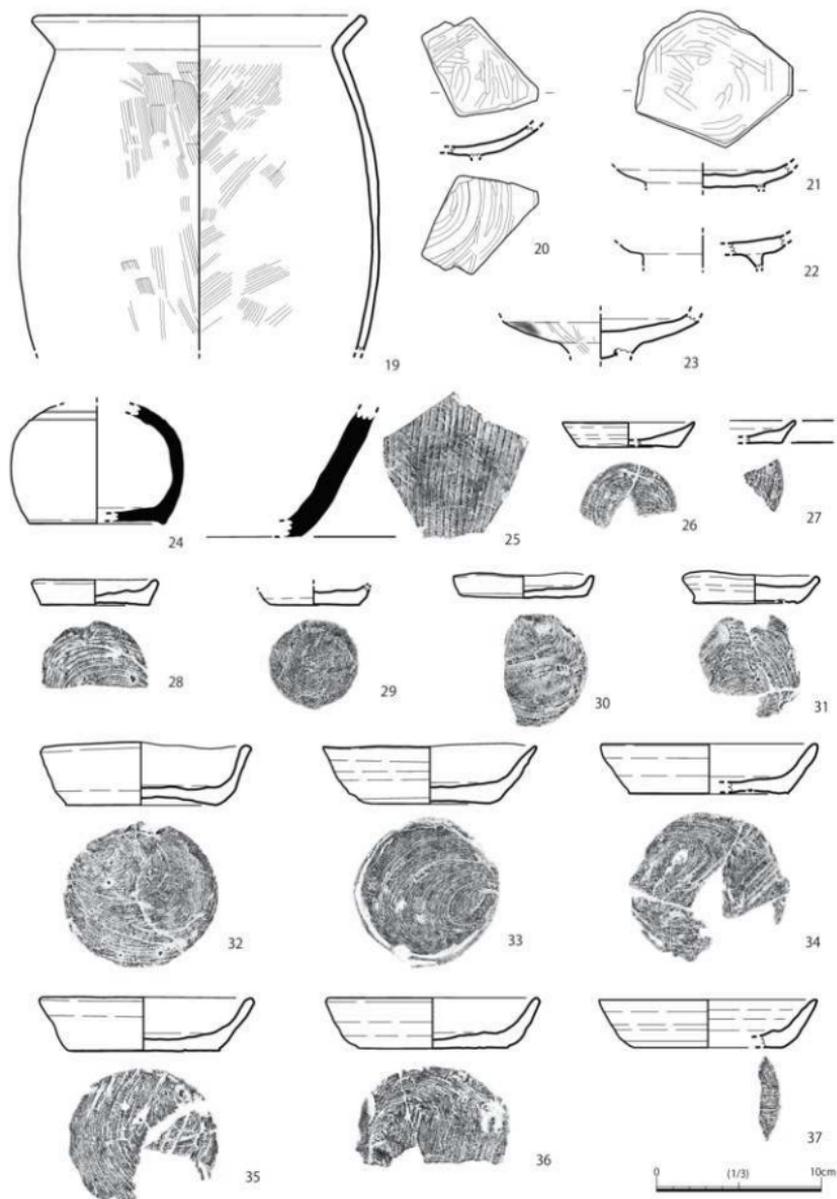
SK05 土層表記

- 7.5m 厚層 2/2、しまりはある。やや粘り。

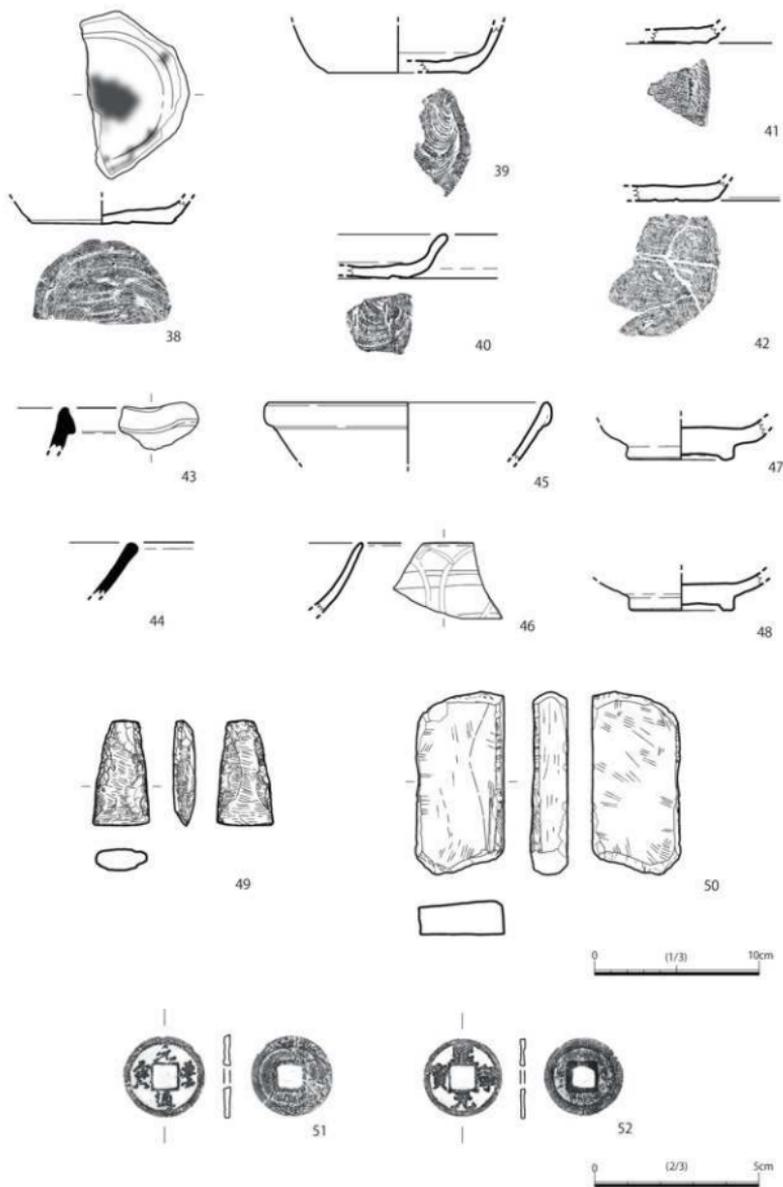
ST02 土層表記

- 7.5m 厚層 2/2 と7.5m 厚層 2/3の土の混合。0.1～1cmの黄褐色粘土とブロック状の黄褐色粘土を多量含む。しまりはある。やや粘り。黄褐色の混入が土上。

第13図 SD01 遺構土層断面図及びSK05・ST01 断面図 (S=1/50)



第 14 图 SD01 出土遺物実測図①



第 15 图 SD01 出土遺物実測図②

SX01 (第18図～第20図)

調査区南西のB2・B3・C2・C3・C4グリッドに位置する基壇状遺構である。規模は、長軸約7.4m、短軸約5.1mを測る。プランは南側にやや張り出しを持つ台形状を呈しており、調査区南西側はトレンチ設置により一部失われている。断面形は、東側に比べて西側が緩やかである。基壇の表面には川原石が葺かれており、中央部に集中している。

特に、基壇中央部より北西方向の位置からは、約20cm～30cmの6つの安山岩で組まれた堀方を伴う石組遺構が検出された。石組に囲まれた内部には、複数の川原石が堀方底面より約10cm上の位置に認められた。ST01は、石組のほぼ直下の位置にあたり、主体部と推定される。石組遺構は五輪塔の地輪下の地下遺構と考えた場合、地表面に石材が半分露出することから不安定となる。この石組遺構には卒塔婆があった可能性を挙げておきたい。

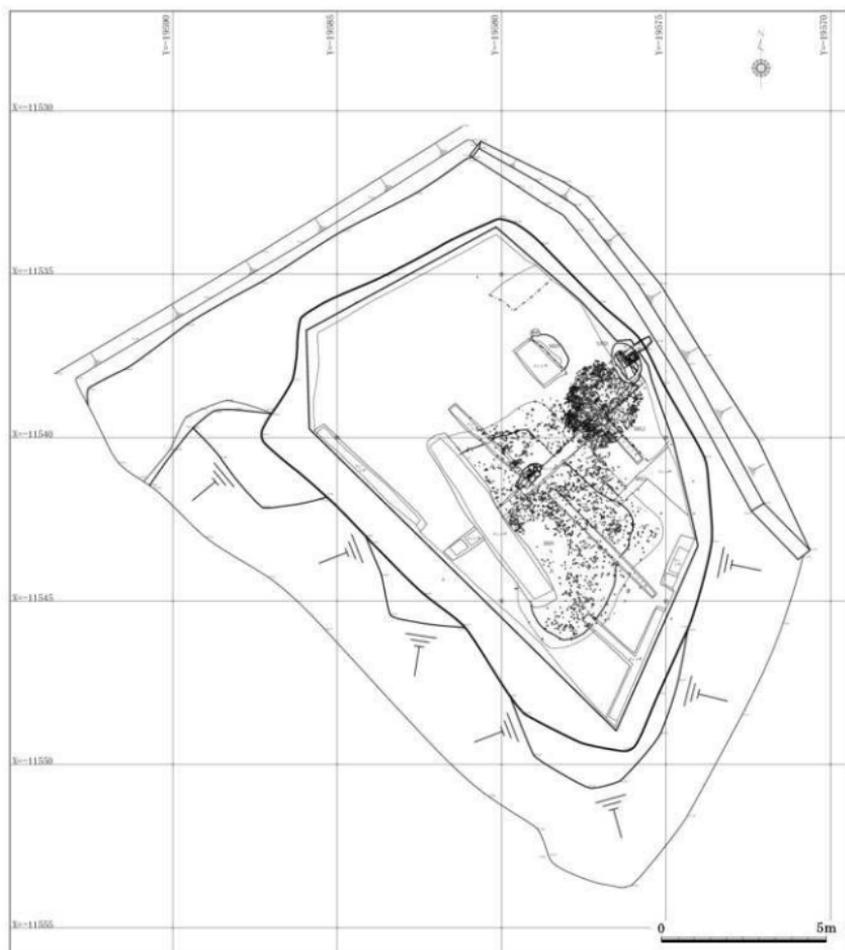
ST01は、下層面の調査時に検出されたため、SX01と連続して土層断面による確認はできなかった。しかし、検出された位置と出土状況からSX01に伴う土壌と判断した。ST01の平面プランは、楕円形を呈し、断面形は箱型に近い形状であったと推定される。規模は、直径約0.9m、深さ約0.15m～0.3mを測る。埋土からは、鉄釘、骨片が出土した。SX01の基壇はⅡ層を削平し、盛土のⅪ層により構築されている。Ⅺ層上にSX02の埋土にあたる7層があることから、SX01はSX02に先行すると考えられる。出土遺物は、白磁、瓦質土器、鉄滓、銅銭の「洪武通宝」などが出土した。

SX02 (第23図)

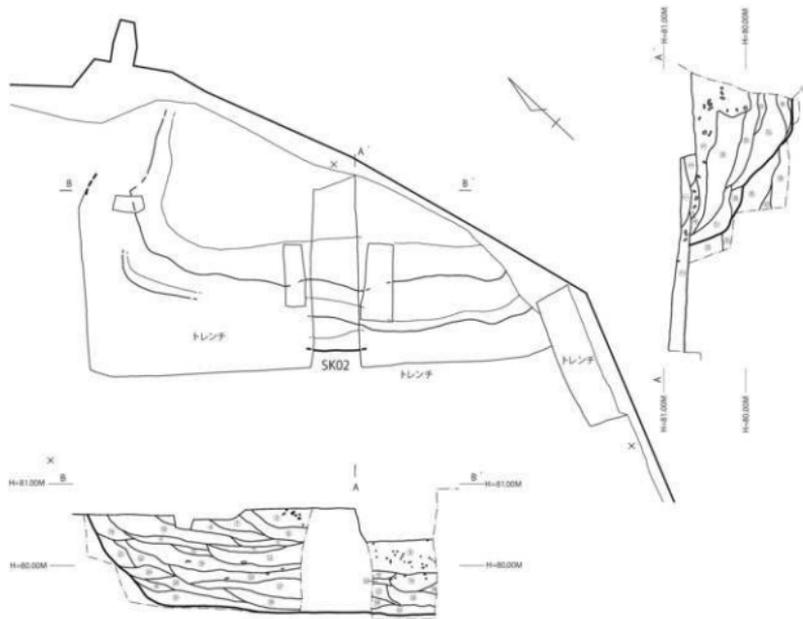
調査区北東のC2・C3グリッドに位置する基壇状遺構である。規模は、長軸2.60m、短軸2.24mを測る。平面プランは楕円形であり、堀方は認められず、断面形は、西側に比べて東がやや緩やかである。基壇の表面には川原石が葺かれており、特に西側に川原石が集中していた。当初は礫石経と考えていたが、X線分析調査をしたところ、墨書が認められなかったことや、SX03の直下から礫石経と推定される集石遺構が確認されたことなどから、基壇状遺構と判断した。SX03の土層堆積状況において、SX02上にSX03の4層(第25図)があることから、SX02はSX03に先行する。

SX03 (第24図～第26図)

SX02に隣接して確認された板碑を設置した基壇状遺構である。土層堆積状況は、SX02上位及び基盤層となるⅡ層の上位に3層(第24図)があり、盛土の3層により構築されている。この3層上面はSK01と板碑堀方の検出面である。3層の上位には、盛土の2層により板碑を安置させる。1層は、近世以降の堆積土(表土)である。竹根により攪乱が激しく、土層堆積の確認は困難であったが、調査前の現況において基壇状を呈しており、盛土と考えられる上下2層からも基壇を構築したと判断した。基壇状遺構の幅は7.00m、残存する奥行2.48m、高さ0.55mを測る。板碑の正面は北東側にあり、現在の竹迫日吉神社に通じる「参宮線」に面し、急な法面となっている。この「参宮線」は、聞き取りによれば近代以降の道路であることから中世の時期は、基壇が北東側に延びていた可能性がある。板碑正面に置かれている水盤の時期は、近世以降とみられる。板碑には「奉書一字一石大乗妙典一部」の銘文が記されており、板碑直下から川原石を伴う円形の土坑を確認した。板碑直下の土坑は、直径約0.53m、深さ0.24mを測る。板碑直下の掘方は長軸約1.32m、短軸約0.82m、深さ約0.50mを測る。出土した川原石を洗浄し、肉眼観察を行ったが墨書は確認できなかった。出土位置や銘文から礫石経と考えたい。調査当初、板碑はSX01よりも高い位置にあることから近世以降に移設されたと想定していた。しかし土層堆積状況や礫石経と考えられる土坑などから板碑は、原位置を保っていると判断した。板碑は、高さ1.46mで地表面からの高さが0.98m、最大幅0.90m、厚み0.36mを測る。板碑の銘文には願文「現世安徳 預修冥福 後世善処」とあり、願主の「大林大和守岑徳 月泉浄金壽位」の他に「干時大永八年戊子二月日 妙慶 道貞 長栄 妙清 道性禪門 妙善禪尼」とある。



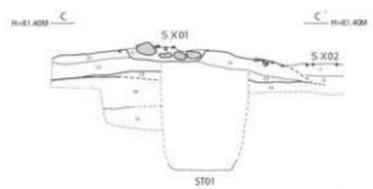
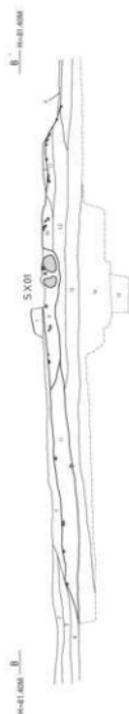
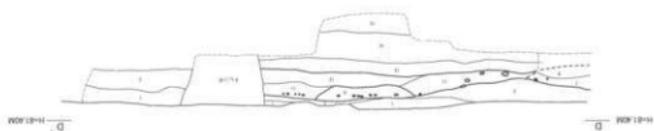
第16図 上層面遺構配置図(S=1/150)



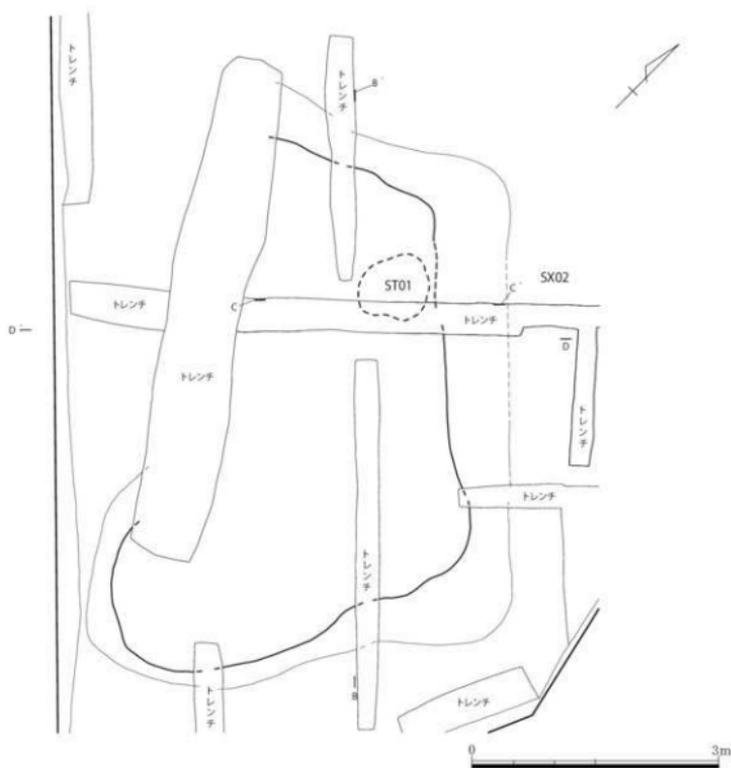
SK02 土壌注記

- ① 75YH 検層域 2/1 中や粘質、しまりがある。礫石を含まない。
- ② 75YH 検層域 2/1 中や粘質、しまりがある。①と同色。礫石を少量含む。(S X01)
- ③ 75YH 検層域 2/2 しまりは強い。
- ④ 75YH 検層域 2/3 中や粘質、しまりがある。②と同じ。礫石を含む。
- ⑤ 75YH 検層域 2/3 しまりは強い。①と同じ。礫石を少量含む。
- ⑥ 75YH 検層域 2/2 しまりは強い。①と同じ。1mm 程度の黄褐色のブロック状の二方を少量含む。
- ⑦ 75YH 検層域 2/2 しまりは強い。①と同じ。黄褐色のブロック状の二方を多く含む。
- ⑧ 75YH 検層域 2/2 しまりは強い。黄褐色のブロック状の二方を多く含む。①と同じ。1～2mm の黄褐色粒を多く含む。
- ⑨ 75YH 検層域 2/1 しまりはある。
- ⑩ 75YH 検層域 2/2 しまりは強い。⑧より黄褐色のブロック状の二方を多く含む。①と同じ。
- ⑪ 75YH 検層域 2/2 しまりは強い。①と同じ。⑧より黄褐色のブロック状の二方は少ない。
- ⑫ 75YH 検層域 2/2 ⑩と同色だがやや暗い色。しまりはある。1～2mm の黄褐色粒を多く含む。
- ⑬ 75YH 検層域 2/1 の上と⑩の 75YH 検層域 2/2 の上との境界。
- ⑭ 75YH 検層域 2/2 しまりは強い。①と同じ。⑧より黄褐色のブロック状の二方は少ない。
- ⑮ 75YH 検層域 2/1 ①と同色だが、中や粘り色。しまりはある。1～2mm の黄褐色粒を少量含む。
- ⑯ 75YH 検層域 2/3 ①と同じで、1mm 程度の黄褐色粒を少量含む。2～3mm の黄褐色のブロック状の二方を少量含む。
- ⑰ 75YH 検層域 2/2 しまりは強い。①と同じ。1mm 程度の黄褐色粒を少量含む。
- ⑱ 75YH 検層域 2/1 しまりはある。
- ⑲ 75YH 検層域 2/1 しまりはある。礫石を少量含む。
- ⑳ 75YH 検層域 2/1 しまりはある。⑧よりやや粘り色。礫石を含まない。
- ㉑ 75YH 検層域 2/2 ⑩と同色。10cm 以上の黄褐色のブロック状の二方を多く含む。しまりはある。1～2mm の黄褐色粒を少量含む。
- ㉒ 75YH 検層域 2/1 ①と同色。しまりはある。2～5cm の黄褐色のブロック状の二方を含む。しまりは強い。1～2mm の黄褐色粒を少量含む。
- ㉓ 75YH 検層域 2/2 の上は 1～5cm のブロック状の黄褐色粒を少量含む。1mm 程度の黄褐色粒を少量含む。
- ㉔ 75YH 検層域 2/1 しまりはある。①と同じ。同層だが礫石を含まない。
- ㉕ 75YH 検層域 2/3 ①と同色。1mm 程度の黄褐色粒を少量含む。2～5cm の黄褐色のブロック状の二方を多く含む。
- ㉖ 75YH 検層域 2/1 ①と同色だが、⑧より 3～10cm の黄褐色のブロック状の二方を多く含む。1～2mm の黄褐色粒を少量含む。
- ㉗ 75YH 検層域 2/2 ①と同色だが、ブロック状の黄褐色粒を含まない。
- ㉘ 75YH 検層域 2/2 しまりはある。1mm 程度の黄褐色粒を少量含む。75YH 検層域 2/1 の上より少量混入。
- ㉙ 10YH 検層域 2/2 しまりは強い。1～3mm の黄褐色粒を少量含む。
- ㉚ 10YH 検層域 2/3 しまりは強い。
- ㉛ 75YH 検層域 2/3 ①と同じ色。1mm 程度の黄褐色粒を少量含む。
- ㉜ 75YH 検層域 2/1 基本土層の層よりしまりは強い。中や粘質。全体的にクワコロを多く含む。0.1～0.3 cm の褐色粒をやや多く含む。基本土層のY層に相当。
- ㉝ ①と同色だが、⑧より 3～10cm の黄褐色のブロック状の二方を多く含む。1～2mm の黄褐色粒を少量含む。
- ㉞ 75YH 検層域 2/2 しまりは強い。
- ㉟ 10YH 検層域 2/3 しまりは強い。

第17図 SK02遺構実測図(S=1/60)



第18図 SX01 遺構実測図① (S=1/60)

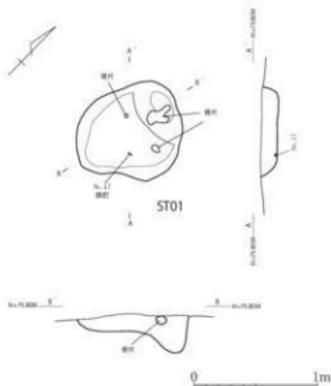


SX01 土層注記

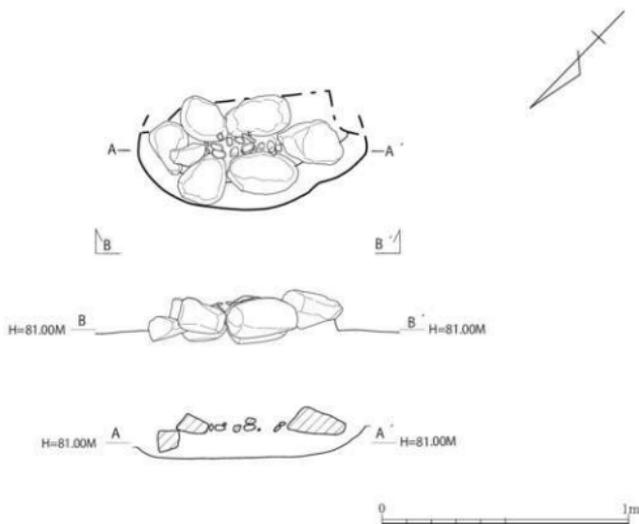
- 1 高さ
- 2 10% 厚層 2/2 しまりは深い、やや粘質、0.1m程度の褐色砂を多く含む。
- 3 10% 厚層 3/3 しまりは深い、やや粘質、0.1m程度の褐色砂をやや多く含む。
- 4 7.5% 厚層 1/2 しまりは深い、やや粘質、1層に3%。
- 5 10% 厚層 2/2 しまりは深い、やや粘質、1層に3%。
- 6 10% 厚層 3/2 しまりは深い、やや粘質、
- 7 10% 厚層 3/2 しまりはある、やや粘質、礫石を多量含む、0.1m程度の褐色砂も少量含む。
- 8 10% 厚層 3/3 しまりは深い、やや粘質、
- 9 7.5% 厚層 2/3 しまりはある、礫石を多量含む、10~20cmの石を数個含む。
- 10 7.5% 厚層 2/2 しまりは深い、やや粘質、2~3cmのブロック状のクワコを少量含む、1~3mmの褐色砂をやや多く含む、B層に対応。
- 11 10% 厚層 2/3 しまりは深い、やや粘質、0.1m程度の褐色砂をやや多く含む。
- 12 7.5% 厚層 3/2 しまりは深い、1~3cmのブロック状の褐色色のクワコを少量含む、0.1m程度の黄褐色砂を多量含む、B層に3%。
- 13 7.5% 厚層 2/2 しまりは深い、やや粘質、2~3cmのブロック状のクワコを少量含む、1~3mmの褐色砂をやや多く含む、B層に対応。
- 14 7.5% 厚層 3/3 しまりは深い、やや粘質、2~3cmのブロック状のクワコを多量含む、1~3mmの褐色砂を多量含む、V層に3%。
- 15 7.5% 厚層 2/2 やや粘質、しまりは深い、0.1~0.3cmの褐色砂を多量含む、V層に3%。

ST01 土層注記

- 7.5% 厚層 3/3 1cm以下のブロック状のクワコを含む、B層の上が入る。



第19図 SX01 遺構実測図②(S=1/60) 及び ST01 遺構実測図(S=1/40)



第20図 SX01 石組実測図 (S=1/20)

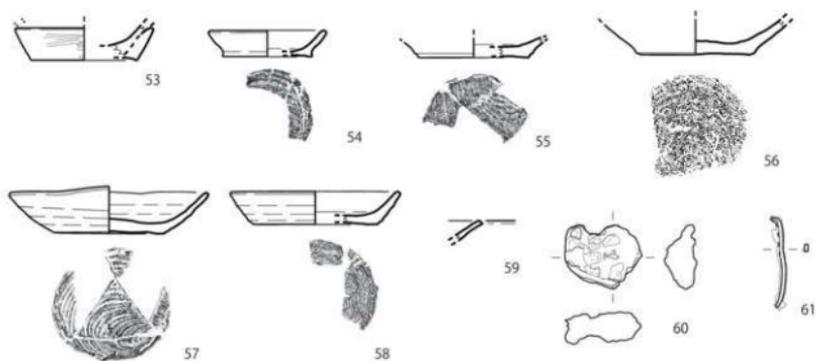
[4] 中世の出土遺物 (第14図～第15図・第21図～第22図・第27図～第30図)

SD01 出土遺物は、19～52である。19は、弥生土器の甕。20～22は、高台付坏で20と21は、内面及び内外面にヘラミガキの痕跡が認められる。23は、高坏で、内外面に赤彩の痕跡が認められる。24は、古代の須恵器で小型壺の口縁部から頸部が欠失している。器形は肩部が丸みを帯び、底部へ向かいながら、やや窄まる。25は、須恵器の甕及び壺の底部で、体部外面にタタキ目が残る。26～31は、中世土師器の小皿で、口径はおよそ6cm代後半から8cm代前半を測る。底部切り離し技法は回転系切り。32～42は、中世土師器の坏で、口径は10cm代前半から13cm代前半を測る。底部切り離し技法は回転系切りで、板状圧痕が認められるものもある。43は、中世須恵器で、東播系片口鉢の口縁部。44は、埴の破片で、東播系須恵器である。45は、白磁碗で、口縁部に肉厚の玉縁を持つ。46は、青磁碗で、外面に片切り彫りの蓮弁文を施す。47と48は、青磁碗の高台部。49は、磨製石斧で、石材は蛇紋岩。50は、砥石で石材は流紋岩(天草砥石)。51と52は、宋銭で、51が元豊通宝で52が熙寧通宝。

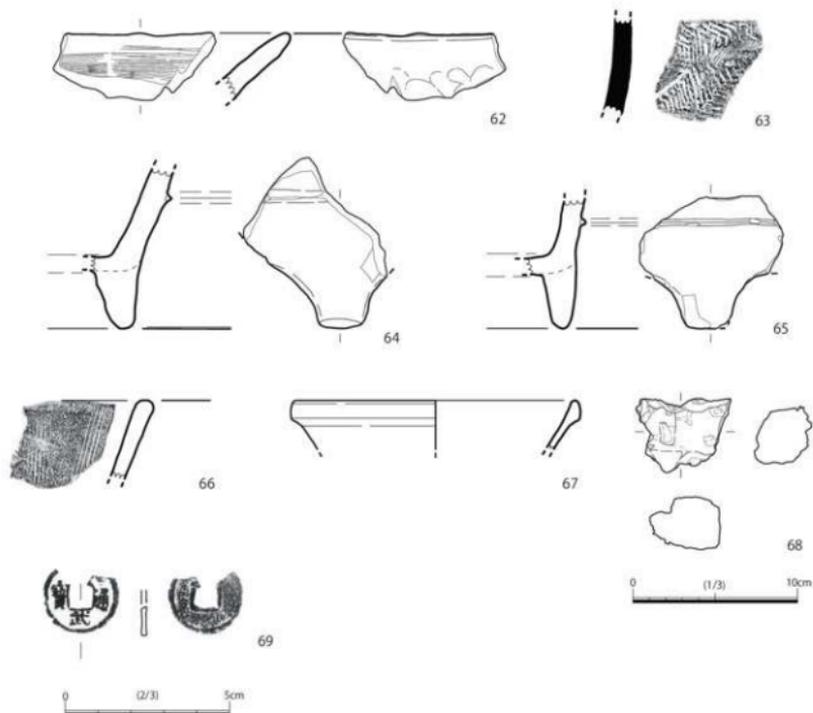
SK01 出土遺物53は、中世土師器の小皿で、焼成時に2個体分が溶着したと思われる。SK02 出土遺物は54～61である。54と55は、中世土師器の小皿。56は、復元底径7.2cmを測る。底部切り離し技法はともに回転系切りである。57、58は、中世土師器の坏。57は、口径12.1cmで、ほぼ完形となる。58は、復元口径10.3cmを測る。底部切り離し技法はいずれも回転系切りで、板状圧痕は認められなかった。59は、白磁皿の破片で、口縁部はやや外反気味になる。60は鉄滓。61は、鉄釘と思われる。

SX01 出土遺物は、62～69である。62は、土師器の甕の口縁部で、外面に指頭圧痕が認められる。63は、須恵器の甕及び壺の胴部で、外面にタタキ目が残る。64と65は、瓦質土器で火鉢である。体部外面下に突帯を貼り付ける。ともに脚が付く。66は、瓦質土器の擂鉢。67は、白磁碗で、口縁部に肉厚の玉縁を持つ。68は鉄滓。69は、明銭で、洪武通宝である。

SX03 出土遺物の70は、水盤で、石材は阿蘇溶結凝灰岩である。



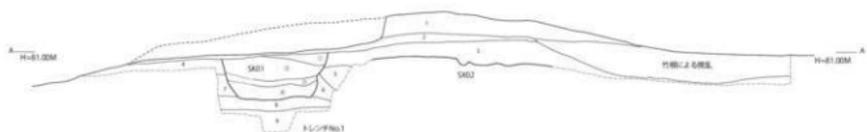
第 21 図 SK01・SK02 出土遺物実測図



第 22 図 SX01 出土遺物実測図



第23図 SX02 遺構実測図 (S=1/40)



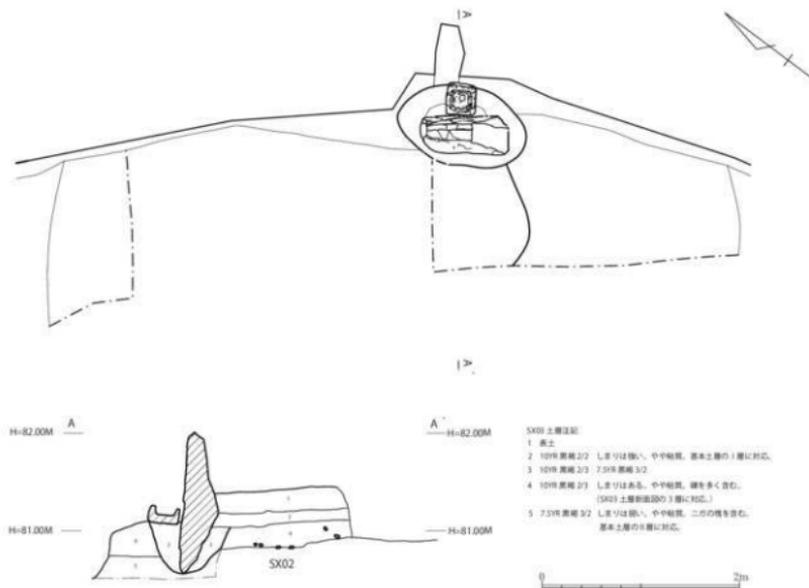
SK01 土層注記

- 1 7.5m厚層 2/2 遊歩階段掘出し
- 2 10m厚層 2/2 しまりは強い、やや粘質、1層に対応
- 3 10m厚層 2/3 しまりはある、やや粘質、(SK01)遺構取壊後の4層に対応
- 4 7.5m厚層 2/2 しまりは強い、やや粘質、二つの構造物、9層に対応
- 5 10m厚層 2/3 やや粘質、しまりが強い、硬質、1~5cmの褐色粒を多数含む
- 6 10m厚層 2/3 厚層よりわずかに強い、しまりは強い
- 7 7.5m厚層 2/2 8に対応し、しまりは強い、1~3mmの褐色粒を多く含む、2~3cmのブロック状のウレコを少量含む、8層に対応
- 8 7.5m厚層 2/3 8に対応し、しまりが強い、やや粘質、1~3mmの褐色粒を多く含む、全体的にウレコを含む、9層に対応
- 9 7.5m厚層 2/2 しまりが強い、やや粘質、1~3mmの褐色粒を多数含む、V層に対応

SK02土層注記

- ① 7.5m厚層 4層 褐色粘質土、しまりがない
- ② 10m厚層 2/2 やや粘質、しまりが強い、1~2mmの褐色粒を少量含む
- ③ 10m厚層 2/2 2層よりしまりが強い、やや粘質、1cm程度の褐色粒を少量含む
- ④ 7.5m厚層 2/2 2層よりしまりが強い、やや粘質、1~4cmのブロック状の黒土を少量含む、1cm程度の褐色粒を多数含む8層に対応

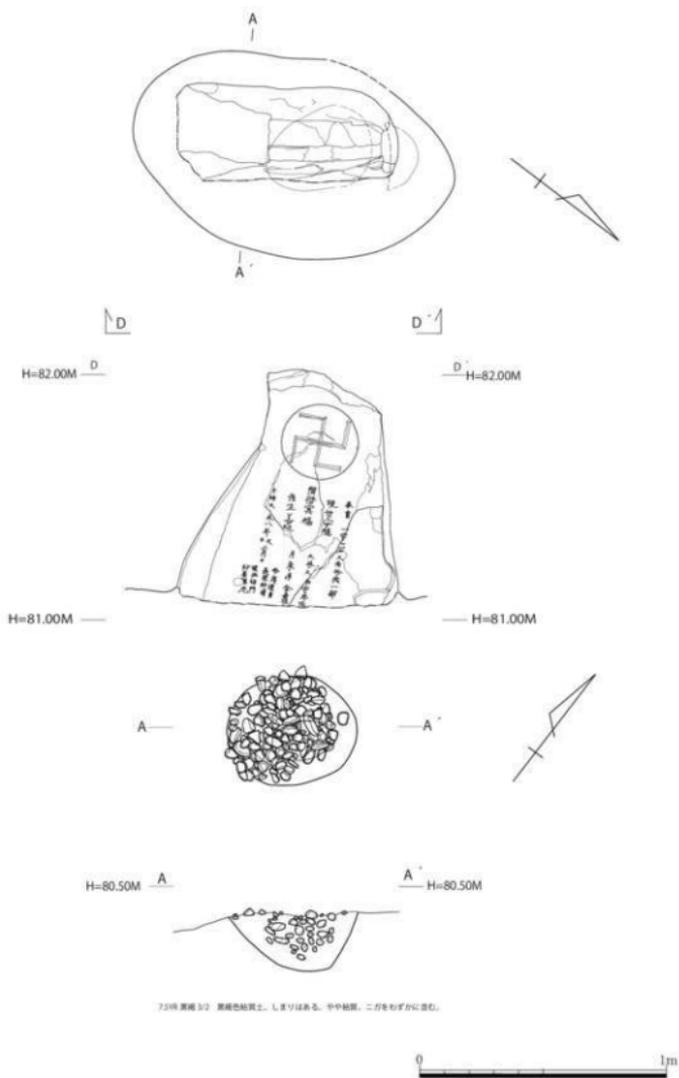
第 24 図 SK01 及び SX03 土層断面図 (S=1/60)



SX03 土層注記

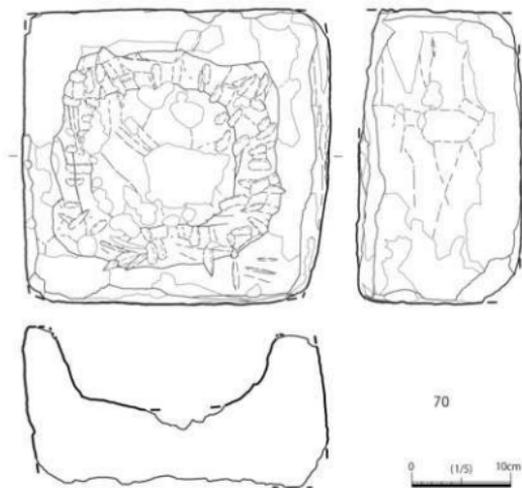
- 1 粘土
- 2 10m厚層 2/2 しまりは強い、やや粘質、基本土層の1層に対応
- 3 10m厚層 2/3 7.5m厚層 3/2
- 4 10m厚層 2/3 しまりはある、やや粘質、礫を多く含む、(SK01)土層取壊後の9層に対応
- 5 7.5m厚層 3/2 しまりは強い、やや粘質、二つの構造物、基本土層の9層に対応

第 25 図 SX03 遺構実測図① (S=1/50)

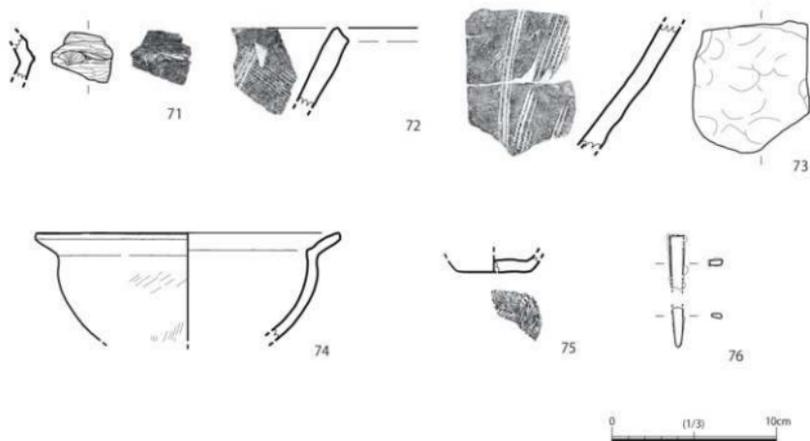


720号 遺構 ② 赤褐色粘土、しまりはある、中や粘、二方をむぎかに並む。

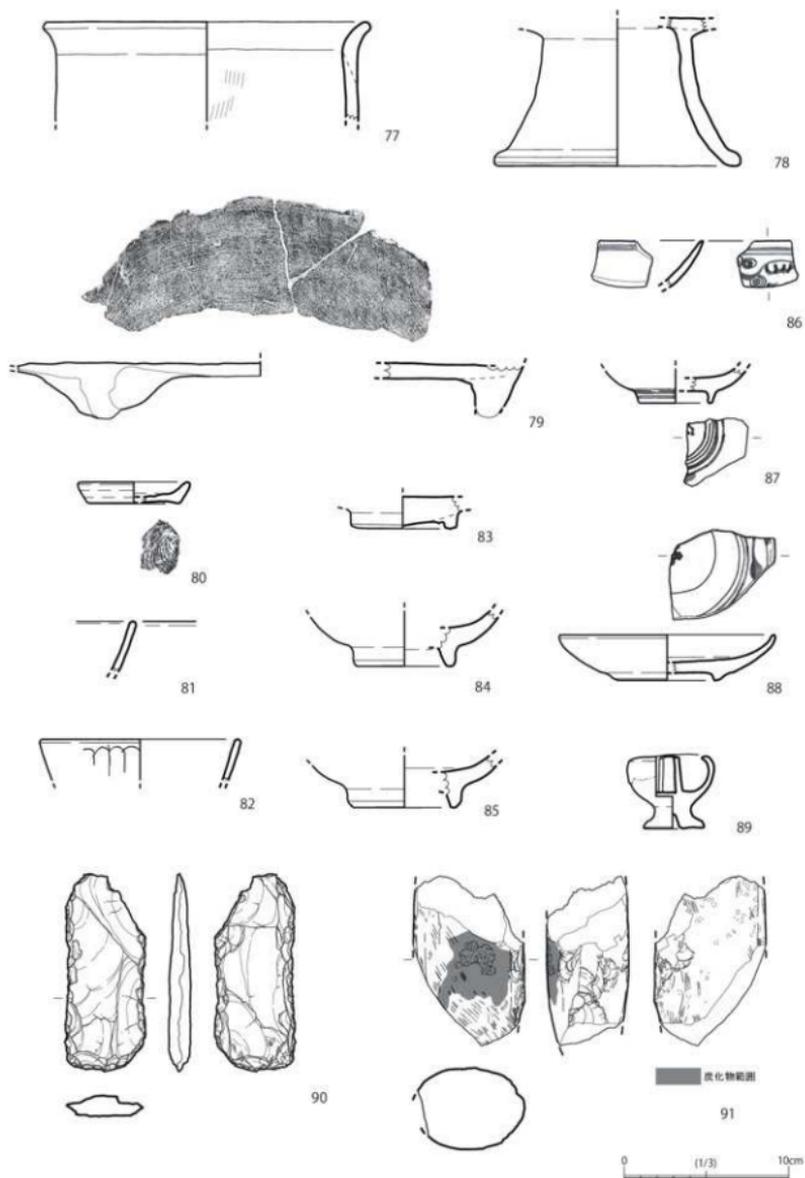
第 26 図 SX03 遺構実測図② (S=1/20)



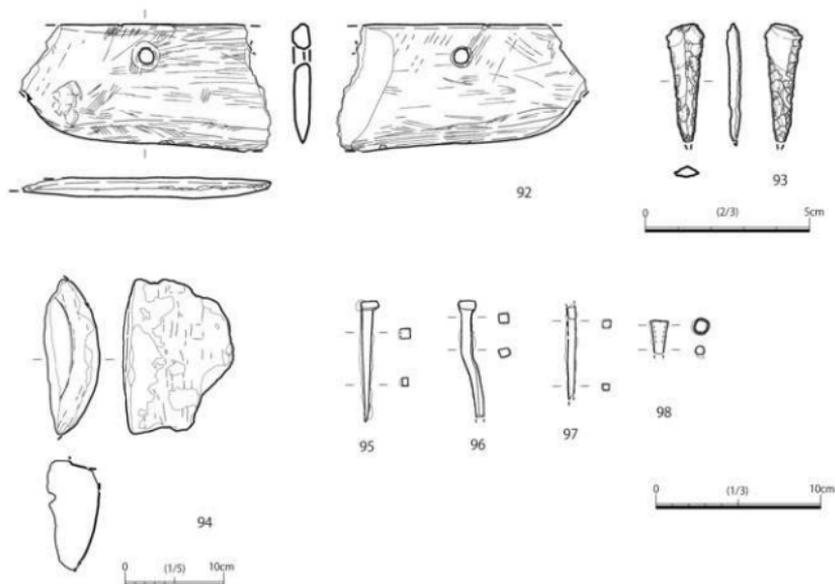
第 27 図 SX03 出土遺物実測図



第 28 図 SK05・SK08・SK09・SP01・SP13 出土遺物実測図



第29図 遺構外出土遺物実測図①



第30図 遺構外出土遺物実測図②

SK08 出土遺物の 71 は、黒色磨研土器で、突帯部に二枚貝の押圧を施す。浅鉢である。

SK09 出土遺物の 72 と 73 は、瓦質土器の播鉢。SP13 の 74 は、弥生土器の高坏坏部と思われる。口唇部は斜め上方に開く。SP01 出土遺物の 75 は、復元底径が 4.5cm の土師器の小皿で、底部切り離し技法は回転糸切りである。SK05 の 76 は、鉄製品で、穿孔具もしくは鉄釘と思われる。

遺構外出土遺物は、77～94 である。77 は、土師器の甕である。78 は、土師器の高坏の脚部。79 は、瓦質土器で火鉢の脚。80 は、復元口径が 6.8cm の中世土師器の小皿で、底部切り離し技法は回転糸切りである。81 は、青磁碗で、口縁部の破片。82 は、青磁碗で、外面に片切り彫りの幅の狭い蓮弁文を施す。83 は、青磁碗の高台部で、高台は低い。84 は、青磁碗の高台部で、やや高い高台を持つ。85 は、青磁碗の高台部で、やや高い高台を持つ。86 は、染付碗で外面に界線と草花文を施す。87 は、近世の染付碗で、高台内に銘が認められる。88 は、染付皿で、内面は蛇の目釉剥ぎを施し、文様を描く。89 は、近世の陶器の燗台。90 は、打製石斧で、石材は緑色片岩、完形。91 は、太形始刃石斧で、石材は玄武岩と思われる。92 は、石包丁で、石材は頁石。93 は、石錐で、石材はチャート、先端部を若干欠損。94 は、五輪塔の空風輪で、石材は阿蘇溶結凝灰岩、表面の加工は丁寧である。95～97 は、鉄釘である。98 は、空洞があり、キセルと思われる。

第IV章 まとめ

今回の発掘調査では、弥生時代後期のSI01（竪穴建物跡）1基とSD02（溝状遺構）1基が確認された。竪穴建物跡は、土層堆積状況において溝状遺構より古い時期と思われる。この溝状遺構は、陣ノ内遺跡で確認された弥生時代終末の環濠と考えられる溝状遺構とは時期差があり、軸方向などから連続する遺構ではない。SD02及びSI01と切り合い関係にあるSD03は、弥生時代後期より古い時期である。

SD01は、南東方向へ下がり、堀底面が凹凸となる障子堀状を呈している。中世宇土城跡において障子堀に見える千畳敷北側の横堀（SD02）は、掘削途中の堀跡である。SD01の障子堀状を呈する特徴は、未完成ではなく、いわゆる「障子堀」とも異なる。県内においてもこのような事例は稀有である。陣ノ内遺跡は、中世の堀跡が複数確認され、竹迫城絵図に竹迫氏館跡の記載や原口新城跡との位置関係より竹迫氏関係の館跡と推定した。また、堀底に構築された地下式土壇3基（16世紀～17世紀代）、土壇（近世～近代）や礎石経3基（近世末）を確認しており、調査区外の北西側に清寿院跡の堂宇と石造物群が存在することから、この遺跡は、合志氏が竹迫氏に変わり竹迫城を拠点とした16世紀前半（天文期）に合志氏の菩提寺である清寿院跡の敷地となったと考えられる。今回、確認されたSD01の主軸方向は、陣ノ内遺跡の堀跡や原口新城跡と概ね一致しており、本遺跡は、原口新城跡もしくは陣ノ内遺跡の一郭で竹迫氏に関連した城館であったことが考えられる。原口新城跡の調査では、15～16世紀とみられる土壇13基、地下式土壇1基が確認された。調査区外の北西側にあたる台地先端部に天正17年銘の天台宗僧侶の墓石が存在していることから僧坊等の施設があった可能性を調査者は指摘している。

SK02は、Ⅲ層で検出された大型の土坑であり、SK02の上層から中層にかけて多くの川原石や鉄釘などが出土している。この状況は、SK02が構築された以前の時期に中世の墓所がすでに存在していたことを示唆する。SD01を覆う層位のⅣ層は、墓所を造営するための整地層であった可能性が考えられる。今回の調査では、調査区が狭く、墓地整理を行った明らかな痕跡を確認していない。しかし、SK02の構築されたⅢ層上面にはすでに墓地が存在し、SK02の埋没後、SX01が構築された段階に墓地整理が行われたと想定したい。

基壇状遺構であるSX01、02、03は、近接している状況にあり、主軸方向がほぼ同じ方向である。新旧関係は、SX01、02、03の順で構築されていることが確認できた。SX01は、川原石を葺いた基壇が構築され、地表面の石組と地下に骨片が出土した土壇が認められた。SX02は、SX01の裾野を一部、覆う状況で川原石のみで構築した基壇状遺構である。SX03は、SX02を完全に埋没させ、さらにSX01の北東側を埋めて基壇状遺構を構築したものとみられる。五輪塔の空風輪片が出土しており、SX02の基壇状遺構には、かつて五輪塔などがあった可能性が考えられる。SX03は、板碑を埋設する面においてSK01も同一面に構築されており、SK01はSX03に伴う遺構であり、形状より土壇の可能性について指摘できる。

中世における遺構の時期は、SD01の構築時期が14世紀～15世紀代を下限とし、SX01が14世紀～16世紀前半、SX03が大永八（1528）年に構築されたと時期比定する。川原石を敷き詰めた基壇状遺構であるSX01に類似する事例は、菊池市酒水住吉（飛熊）虚空蔵菩薩堂の板碑、大津町摩利支天堂の板碑群や無動寺跡の板碑、山都町華藏寺板碑群などが挙げられる。

合志氏が竹迫城に拠点を住吉から移す時期は、「肥後国誌」に永正七（1510）年とみられる。板碑（SX03）には、大永八（1528）年、大林大和守岑徳とあり、合志氏の家臣であった大林氏が城下に住んでいた可能性があり、合志氏が竹迫城へ入城した時期を考える上で貴重な資料である。竹迫城絵図の国泰寺跡に「今寺中二観音ノ具仏有り国泰寺ノ本尊ノヨシ云傳フ国タイ寺ハ竹迫氏ノ位牌効力」と記述があり、今回の調査で確認された墓所は、竹迫氏に関係した菩提寺であった可能性がある。この大永八（1528）年と同様に「肥後国誌」には、竹迫日吉神社において合志隆岑が再興をしたと記した棟札の記述がある。また「国郡一統志」には、竹迫日吉神社について「上社者、後土御門院文明九年（1477）六月日 有天怪事 汚乎社壇因茲改地洛人大進法眼新造神像匠氏修理亮経菅神殿」との記述がみられる。大進法眼は、13世紀末から九州で活躍する仏師猪熊一門と考えられ、古代から中世にかけて都などで活躍した「印派仏師」との関連も注目されている。註1)



第31図 遺跡周辺図

本遺跡は、天文期以前の時期において国泰寺の敷地に竹迫氏の関連した墓所が造営され、天文期に合志氏の家臣である大林氏の板碑が構築されたと推測する。旧領主の墓所を継続する事例は、八代市古麓城跡の墓所発掘調査において名和氏もしくは在有力者層から相良氏の時期における在有力者層へ変わると推測されているが県内では不明な点が多い。

今回の調査で確認された遺構は、寺院に関わる建物跡は確認できなかったことから、寺域に存在した墓所として位置付けられる。本遺跡の周辺には、陣ノ内遺跡で確認された清寿院跡に関連する遺構、竹迫日吉神社、原口新城跡の一郭に存在した寺院に関連した遺構などを今後、検証していく作業も重要である。応永年間（1394～1402）に肥前萬歳寺（臨済宗南禅寺派）を開山した以享得兼は、見心来復の法嗣で臨済禅の二十一世として肥後国泰寺を開山したとされている。註2）肥後において国泰寺は、本遺跡のみに限られるが史料的な評価が必要であり、これ以外の資料がないため以享得兼が開山とすることは難しいものの、ここに記しておきたい。「肥後国誌」では、竹迫五山跡の1つとして「国泰寺」と記述があるが不明な点も多い。今後、史料や神仏像などの調査も含め進めていくことで、中世竹迫における歴史が復原できることに期したい。

註

註1）文明九年（1477）の記述から竹迫日吉神社が存在していたことが窺える。

註2）荻須純道 1965「日本中世禅宗史」木耳社においては、大冥園和尚の「本朝傳來宗門略列祖傳」（文化五年）を根拠としている。

参考文献

原口城跡 1984 合志町埋蔵文化財調査報告書1 合志町教育委員会

井手誠之輔 1986「萬歳寺の見心来復像考」美術史 119 美術史学会

合志町史編纂協議会 1988「合志町史」合志町

大津町史編纂委員会編 1988「大津町史」大津町

有木芳隆 1998「熊本市・輪雲院の木造如意輪観音坐像と猪熊仏師について」『市史編纂だより』新熊本市史編纂委員会

藤本貴仁 2000「宇土城跡（西回台）Ⅲ」宇土市埋蔵文化財報告書 宇土市教育委員会

坂田和弘 2005「古麓城跡」熊本県文化財調査報告書 227 熊本県教育委員会

米村大 2007「陣ノ内遺跡」熊本県合志市文化財調査報告第1集

九州山岳堂遺跡研究会、九州歴史史料館編 2018「肥後の山岳堂遺跡 池辺寺と阿蘇山を中心に 資料集」

池田朋生 2018「熊本北部における中世墓終焉期の様相 - 阿蘇氏関連墓所の調査報告 -」

「九州地域の中世墓終焉期を探る」第10回中世葬送墓制研究会資料 中世葬送墓制研究会

第2表 土器観察表

観測番号	図説番号	出土状況・出土番号	器種	形状	所在地	通気率(%)			色 調		目 撃		状況	加工	備考
						口縁	底面	器底	内面	外面	内面	外面			
25	71	3018-4層	縄文土器	透鉢	楕円		2.3	褐色(100%)	褐色(100%)	1.0土色 褐色	ナメ 灰白色	良好	黒色	透鉢(2) 灰白色の厚皮を有す。底面褐色。縁部一帯褐色。縁部は土層ででは見られない。	
26	72	3018	縄文土器	透鉢	口縁破片		4.9	褐色(23%)	褐色(23%)	3.0ナメ ナメ	ナメ ナメ ハナナ	良好	黒色		
27	73	3018	縄文土器	透鉢	口縁破片		7.7	褐色(100%)	褐色(100%)	1.0土色 褐色	ナメ ナメ	良好	黒色		
28	74	3012	縄文土器	鉢	口縁(1)	10.0	6.6	1.0土色(100%)	1.0土色(100%)	1.0ナメ ナメ 灰白色 灰白色	ナメ ナメ	良好	黒色		
29	75	3012	縄文土器	小皿	底面(1)	14.5	5.1	褐色(100%)	褐色(100%)	1.0ナメ ナメ	ナメ ナメ	良好	黒色		
30	76	3018	縄文土器	小皿	底面(1)	20.0	6.2	褐色(100%)	褐色(100%)	1.0ナメ ナメ	ナメ ナメ	良好	黒色		
31	77	3018	縄文土器	高台	底面(1)	10.0	9.0	1.0土色(100%)	1.0土色(100%)	1.0ナメ ナメ	ナメ ナメ	良好	黒色		
32	78	3012	縄文土器	大鉢	底面(1)	3.6	3.6	褐色(100%)	褐色(100%)	1.0ナメ ナメ	ナメ ナメ	良好	黒色		
33	80	C10	縄文土器	小皿	底面(1)	16.0	5.3	褐色(100%)	褐色(100%)	1.0ナメ ナメ	ナメ ナメ	良好	黒色		

第3表 陶磁器観察表

観測番号	図説番号	出土状況・出土番号	器種	形状	所在地	通気率(%)			色 調		目 撃		状況	加工	備考
						口縁	底面	器底	内面	外面	内面	外面			
34	81	3001	白磁	鉢	口縁(1)	17.0	3.6	オリーブ(100%)	オリーブ(100%)	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	良好	黒色	口縁部・底面の縁線が赤い。	
35	82	3001	白磁	鉢	口縁部(1) 中央部(1)	4.0		オリーブ(100%)	オリーブ(100%)	磁化層(内)に染みがる。縁部は赤い。中央部が赤い。	磁化層(内)に染みがる。縁部は赤い。中央部が赤い。	良好	黒色	外壁に内装面と同じような色の厚皮を有する。土層に埋め込まれた状態にあり。	
36	83	3001	白磁	高台	底面	6.8	6.4	2.5オリーブ(100%)	2.5オリーブ(100%)	全面磁化層を有する。内面一帯は中央部の縁線が赤い。	全面磁化層を有する。内面一帯は中央部の縁線が赤い。	良好	黒色	縁部は赤い。底面に内装面と同じような色の厚皮を有する。	
37	84	3001	白磁	高台	底面	6.8	6.4	2.5オリーブ(100%)	2.5オリーブ(100%)	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	良好	黒色	縁部は赤い。底面に内装面と同じような色の厚皮を有する。	
38	85	3002	白磁	高台	口縁破片	12.0		オリーブ(100%)	オリーブ(100%)	磁化層(内)に染みがる。縁部が赤い。	磁化層(内)に染みがる。縁部が赤い。	良好	黒色	口縁部・底面の縁線が赤い。	
39	86	3002	白磁	高台	口縁破片	11.0		オリーブ(100%)	オリーブ(100%)	磁化層(内)に染みがる。縁部が赤い。	磁化層(内)に染みがる。縁部が赤い。	良好	黒色	口縁部・底面の縁線が赤い。	
40	87	3002	白磁	高台	口縁破片	11.0		オリーブ(100%)	オリーブ(100%)	磁化層(内)に染みがる。縁部が赤い。	磁化層(内)に染みがる。縁部が赤い。	良好	黒色	口縁部・底面の縁線が赤い。	
41	88	C1-5	白磁	鉢	口縁破片	3.1		オリーブ(100%)	オリーブ(100%)	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	良好	黒色	底面に縁線が赤い。	
42	89	C10	白磁	鉢	口縁(1)	10.2	2.5	オリーブ(100%)	オリーブ(100%)	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	良好	黒色	外壁に内装面と同じような色の厚皮を有する。土層に埋め込まれた状態にあり。	
43	90	白磁	鉢	鉢	底面(1)	9.8	9.6	2.5オリーブ(100%)	2.5オリーブ(100%)	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	良好	黒色	底面に縁線が赤い。	
44	91	A-803	白磁	鉢	底面	1.1	10.1	2.4オリーブ(100%)	2.4オリーブ(100%)	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	良好	黒色	底面に縁線が赤い。	
45	92	C1-5	白磁	鉢	底面(1)	13.0	1.1	10.1オリーブ(100%)	10.1オリーブ(100%)	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	良好	黒色	底面に縁線が赤い。	
46	93	C1-5	白磁	鉢	底面(1)	14.0	2.4	10.1オリーブ(100%)	10.1オリーブ(100%)	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	良好	黒色	底面に縁線が赤い。	
47	94	C1-5	白磁	鉢	底面(1)	14.0	2.4	10.1オリーブ(100%)	10.1オリーブ(100%)	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	良好	黒色	底面に縁線が赤い。	
48	95	A-803	白磁	鉢	底面(1)	10.0	9.8	10.1オリーブ(100%)	10.1オリーブ(100%)	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	良好	黒色	底面に縁線が赤い。	
49	96	C1-5	白磁	鉢	底面	4.8	2.7	4.3褐色(100%)	4.3褐色(100%)	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	磁化層(内)に染みがる。中央部が赤い。	良好	黒色	底面に縁線が赤い。	

第4表 石器観察表

検出番号	遺物番号	図面番号	出土地点・出土番号	器種	残存状況	石材	法量(m ² g)				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
10	9	5	S002下層	磨製石片	基部欠損	蛇紋岩	7.5*	6.2	2.6	151.0*	平造形は磨製を呈すと考えられる。表面は甲が高く、裏面は平面的である。割断面は一部残存が、丁寧な磨製が施されている。
11	17	9	S01No.21	石包丁	両端部欠損	頁岩	4.5*	4.6*	0.75*	17.13*	表面は割断面を大きく覆い、穿孔部の磨製が見られ、破損による再加工が行われたと考えられる。
11	18		S01	スクレイパー	完形	チャート	4.0	2.1	1.55	11.23	扁平の縁を製作対象として右側縁に刃部調整を施す。また、右側縁の一部と下部に使用痕と見られる磨製跡が見られる。
15	49	9	S001西側壁トレンチ	磨製石片	完形	蛇紋岩	6.45	3.45	1.35	41.45	平造形は磨製を呈する小型の石片である。両側縁は割断面が残り基部に磨製痕が見られる。
15	50		S001南側壁	砥石	完形	流紋岩(天然砥石)	11.2	5.4	2.3	215.0	粗粒の砥石である。表面、裏面、右側面に多面的な使用痕があり、右側に流状の磨痕が集中する。上面、下面は本磨製であるが一部に使用による磨痕が残る。左側面は整形時の磨痕が残る。
29	90	9	調査区西側壁	打製石片	完形	緑色片岩	12.10	4.90	1.35	100.0	表面は割断面の磨製が残る。両側縁、先尖が見られる。基部は左右対称で欠損部に再加工が行われたと考えられる。
29	91	9	調査区一帯	太形打製石片	先端・基部を欠損	玄武岩?	10.40*	6.80*	5.00	483.0	右側縁に割断面が残り、部分的に磨製痕が見られる。表面の磨痕は細い幅が多く不明瞭である。表面は中央部に磨製痕の集中と欠損物の付着があり、砥石に転磨されたと考えられる。
30	92	9	C-03+40 I層 No.1	石鏝、右端部欠損	完形	頁岩	3.9*	7.6*	0.65*	25.6*	刃部は磨製痕と思われる磨製跡が集中する。表面の欠損部は磨製による先尖が見られることから欠損後も使用されたと考えられる。
30	93		西側壁南側壁	石鏝	先端部を若干欠損	チャート	3.6*	1.15	0.40	1.32*	縁長範囲を対象として打製を切削後高磨製より二次加工を施す。基部は二次加工で確認のみで磨製痕が残る。

* →は残存値

第5表 石造物観察表

検出番号	遺物番号	図面番号	出土地点・出土番号	器種	残存状況	石材	法量(m ² g)				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
27	70		SX03前	水盤	口縁一部と下部を欠損	阿蘇産結晶灰岩	31.3	30.15	16.7	116.0	内面はツルツル状の工具痕が残る。また外面に一部工具痕が残る。
30	94		B30 I層 (No.5)	空風輪	全体の1/8	阿蘇産結晶灰岩	10.7*	11.1*	5.6*	0.55*	欠損部分は多いが、表面の加工は丁寧で滑らか且直線的な工具痕が見られる。空風輪のうち、風輪の一部のみが残存する。

* →は残存値

第6表 鉄製品・銅銭観察表

検出番号	遺物番号	図面番号	出土地点・出土番号	種類	法量(m ² g)				備考
					長さ	幅	厚さ	重量	
10	10		S002(B1G)	鉄鏝	4.8*	2.2*	0.1*	3.88	
15	51	9	S001南側トレンチ	銅銭	2.6	2.6	0.2	1.01	宋銭(天啓通宝)
15	52	9	S001	銅銭	2.45	2.5	0.15	2.73	宋銭(熙寧通宝)
21	80		SX02南側トレンチ	鉄釘	3.9	4.7	2.1	40.00	
21	81		SX02東側壁(No.8)	鉄釘?	5.5	0.25	0.4	3.27	
22	68		C20、S101(2区)No.9	鉄鏝	4.5	5.6	3.5	102.50	左側部に植物繊維の付着あり
22	69	9	SX01	銅銭	2.1*	2.4*	0.15	1.07	明銭(洪武通宝)
28	76		SX05	鉄釘? (穿孔具?)	3.4	1.4	0.3	6.24	断面の厚さが極端に異なるため別個体か?
30	95		トレンチI(No.15)	鉄釘	7.4	1.15	1.15	14.55	
30	96		南側壁付層	鉄釘	7.15*	1.15	0.7	11.17	
30	97		表層	鉄釘	5.9*	0.5	0.6	6.95	
30	98		G20	平靴ル?	2.1*	1.1	1.1	2.95	上部から下部へ約2/3の位置まで空磨あり。

* →は残存値

写真図版



(1) 竹迫城跡をのぞむ（南西方向より）



(2) 陣ノ内遺跡をのぞむ（北西方向より）



(1) SX01・SX02 検出状況



(2) 下層面遺構完掘状況



(1) SX03・SK01 土層堆積状況(南西方向より)



(2) SX03 板碑正面



(1) SX01 石組遺構検出状況 (南東方向より)



(2) SK02 土層堆積状況 (南西方向より)



(1) SD01 完掘状況 (北西方向より)



(2) SD01 南東壁面土層堆積状況 (北西方向より)



(1) 南西壁面土層断面（北東方向より）



(2) SD02 完掘状況（東方向より）



(1) SI01 完掘状況（南東方向より）



(2) SK04 遺物出土状況



(1) 出土遺物（陶磁器等）



(2) 出土遺物（土師器）



(1) 出土遺物 (銅錢)



(2) 出土遺物 (石器)



(1) 出土遺物 (弥生土器)



(2) 出土遺物 (縄文土器 深鉢)

報告書抄録

ふりがな	こくたいじあと							
書名	国泰寺跡							
シリーズ名	合志市文化財調査報告							
シリーズ号	第6集							
編著者	米村大・前田純子・奈須和貴							
編集機関	合志市教育委員会							
所在地	〒861-1116 熊本県合志市福原2922番地							
発行年月日	2023年2月							
フリガナ 所収遺跡名	所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
こくたいじあと 国泰寺跡	熊本県 合志市 大字 上庄	405	026	32° 53' 44.87"	130° 47' 02.62"	R2.5.20～ R2.10.15	200㎡	切土造成
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
国泰寺跡	寺院跡	縄文時代 弥生時代 中世		土坑、溝、 基壇状遺構	土器、陶磁器、 石造物、銅銭、 鉄製品	中世の墓所		

合志市文化財調査報告書第6集
 国泰寺跡
 切土造成に伴う埋蔵文化財発掘調査

発行年月日 令和5年2月28日
 編集・発行 合志市教育委員会
 〒861-1116 熊本県合志市福原2922番地
 印刷・製本 合資会社 橋本印刷
 〒861-1212 熊本県菊池市泗水町豊水3515-1